

新学習指導要領を見据えたカリキュラム・マネジメント ～熊大式マネジメントシステムの構築～

令和元年度

研究紀要

第33集



Kumamoto University Special Support School

本研究3年間の研究実践はこちら

本研究3年間の研究のポスターをご覧いただけます。



<https://www.educ.kumamoto-u.ac.jp>



教材共有データベース

授業で活用できるプレゼンテーション教材（PowerPoint）のデータを一般公開しています。



特別支援教育のための
プレゼン教材サイト Teach U
ティーユー
<https://musashi.educ.kumamoto-u.ac.jp/>

熊本大学教育実践研究

本校職員が執筆したこれまでの実践論文がご覧いただけます。



<http://reposit.lib.kumamoto-u.ac.jp>

Repository 熊本大学学術リポジトリ
Kumamoto University

後援
熊本県教育委員会
熊本市教育委員会
熊本県特別支援学校長会
熊本県手をつなぐ育成会
熊本大学教育学部同窓会

発行日／令和2年2月15日 発行／熊本大学教育学部附属特別支援学校

〒860-0862 熊本市中央区黒髪5丁目17-1 TEL:096-342-2953 FAX:096-342-2950

見やすい
ユニバーサルフォント
を採用しています。



熊本大学教育学部附属特別支援学校



はじめに

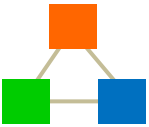
新学習指導要領では、社会に開かれた教育課程の実現を基本理念に、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業を改善し、カリキュラム・マネジメントを確立させることが求められています。

本校では、従前より、児童生徒の夢・希望を踏まえた教育課程の実現に努めてまいりましたが、本研究は、本校の研究のあゆみや教育資源、カリキュラム等を見つめ直す機会となりました。折しも、附属学校としての役割が問われる中、本校職員は、これからの教育について夢を語り合い、助け合ったり批判したりしながら、チームとして研究を進めてきました。熊本大学教育学部の教員が共同研究者として分野横断的に関わっている点も、本校の研究の特徴と言えるでしょう。

なお、児童生徒が、達成感を味わいながら充実した学習に取り組んでいるのか、「自立と社会参加」をめざし、社会と関わり、自分の人生を切り拓いていくための資質・能力が明確化され、育まれ、卒業後につながる教育課程となっているのかなど、検討すべき課題も残されています。どうか忌憚のないご意見をお寄せ下さい。

本研究が、特別支援教育の充実のために、幅広く活用されますことを願ってやみません。

熊本大学教育学部附属特別支援学校 校長 八幡 彩子

	はじめに
	03 学校紹介
	04 学部紹介
	05 本研究について
	07 熊大式マネジメントシステム
 取組 1	09 教育課程のPDCAサイクル
カリキュラムの充実	11 L・M・Sシートの活用
	13 12年間の学びをつなぐ～学部連携班の取組～
 取組 2	15 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善と開発
授業改善・開発	
 取組 3	17 附特就職支援ネットワーク会議の取組
地域社会との連携・協働	21 地域資源の活用及び協働した授業づくり
	25 小学部「“表現”に重点をおいた授業づくり」
	29 知的障がい教育における性教育
取組 2 を中心に 各取組を関連づけて	31 中学部「“質”の高い授業づくりを目指して」
	35 高等部「カリキュラム・マネジメントを活用した 高等部における効果的な授業づくり」
	41 本研究の成果と課題
	43 学校PATH
	45 第33回研究発表会プログラム詳細
	引用・参考文献・MEMO
	おわりに
	研究同人

本校の教育

附属学校としての使命・役割

- 1 先導的・実践的な研究の推進と地域の教育力向上への貢献
- 2 質の高い教育実習提供など学部学生の実践力向上
- 3 教育学部との研究・研修協力や共同研究の推進



教育目標

「自立と社会参加をめざして主体的に取り組む子どもを育てる」

基本方針

子どもの学びを基盤とするチームアプローチにより、一人一人の教育的ニーズに応じた一貫した教育支援を実施する。

めざす姿

F 「ふれあい」	家族 友だち 先生 地域の人々 社会などと「ふれあい」
T 「つながり」	学校 保護者 地域 関係機関 社会などが「つながり」
K 「かなえる」	子どもたちの「夢・希望」を「かなえる」学校

具体目標

- 1 人々とかかわり、望ましい人間関係をつくることができる
- 2 身の回りのことを自分で行い、健康で明るい生活を送ることができる
- 3 社会や働くことへの関心や意欲を高め、社会での役割を果たすことができる
- 4 個性や能力を発揮し、楽しく豊かな生活を送ることができる



学部	学年	男子	女子	学級在籍数	計
小学部	1年	1	2	6	18
	2年	2	1		
	3年	2	1	6	
	4年	3	0		
	5年	2	1	6	
	6年	3	0		
中学部	1年	6	0	6	18
	2年	3	3	6	
	3年	3	3	6	
高等部	1年	5	3	8	25
	2年	5	4	9	
	3年	6	2	8	

令和元年度5月1日現在

高等部の卒業生

約500人

過去5年間の進路

就職
(就職, A型等) 24人

各種福祉施設等
(B型, 移行支援, 生活介護入所支援) 19人

学部紹介

小学部

学校生活の楽しさを味わいながら、身辺処理技能の向上、対人関係、興味関心や生活経験の拡大等を目指し、学習に取り組んでいます。



国語・算数



生活



図画工作



自立活動

週時程表

	月	火	水	木	金
8:50	全校朝会 ／道徳	朝のしたく・係活動・遊び・朝の会			
10:10		国語／算数／図工			
10:45	朝の会	体育「小学部タイム」			
	生活単元学習／教科別の指導				
11:30	給食準備・給食・自由遊び・掃除				
13:25	帰りの活動	自立活動	国語／算数		
14:00		帰りのしたく・帰りの会			
14:40					

中学部

基本的な生活習慣や技能の定着を図りながら、生活経験の拡大に努め、仲間と共に協力して自信をもって行動できる生徒の育成を目指します。



国語・数学



社会



作業学習



自立活動

週時程表

	月		火		水		木		金	
8:30	朝のしたく・掃除・朝の会									
9:20	教科別の指導									
9:50	特活	保健	保健体育 /道徳		保健 体育		音楽		保健 体育	
10:20	職・家	体育								
11:50	教科別の指導／生活単元学習 ／作業学習／総合的な学習の時間								職業・家庭 /美術	
13:10	給食・昼休み・学習のしたく									
14:05	教科・帰りの会		国/数		自立活動		国語/数学			
14:50			帰りのしたく・帰りの会							

高等部

生活全般において、学校生活から社会生活への円滑な移行を意図した教育を行い、生徒たちの卒業後のよりよい社会参加を目指します。



国語・数学



保健体育



職業(班別作業)



自立活動

週時程表

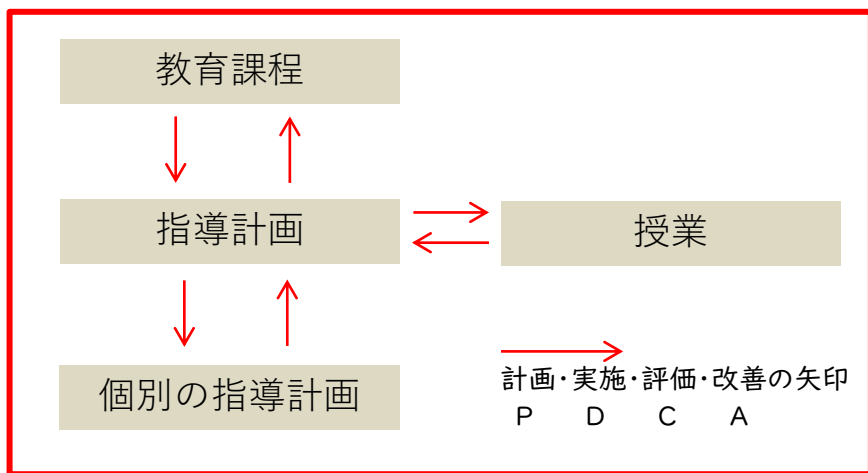
	月	火	水	木	金
8:30	クラスタイム				
9:00	高等部集会	保健体育	特別活動 ホームルーム	保健体育	社会/理科
9:20	全校朝会				外国語
10:00	美術 ／家庭	職業／生活単元学習 ／総合的な学習(探究)の時間			理科 ／家庭
12:00	給食・昼休み				
13:00	清掃	自立活動	職業／生単 ／総学	国語	数学
13:40	クラスタイム	学部清掃			
14:10	クラスタイム				
15:00	クラスタイム				



本研究について

本校では、文部科学省「特別支援教育に関する実践研究充実事業（新学習指導要領に向けた実践研究）」を受託し、平成29年度から3カ年計画「次期学習指導要領を見据えたカリキュラム・マネジメント～熊大式マネジメントシステムの構築～」を研究テーマに、「カリキュラムの充実」「主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善及び開発」「地域社会との連携・協働」の3つの取組を柱にして研究実践に取り組んできました。最終年度となる令和元年度は、構築した熊大式マネジメントシステムにおいて教育課程の検討や改善が機能しているかという実践検証を行うとともに、日々の実践である授業を中心として、それぞれの取組を相互に関連付けながら、新学習指導要領の理念となっている「社会に開かれた教育課程」の実現を目指しました。

カリキュラム・マネジメントとは



新学習指導要領で示されているカリキュラム・マネジメントというのは、教育課程の改善のみならず、**赤い囲み**で示した、**計画・実施・評価・改善**を行っていく上で、必要かつ関連ある内容・方法・体制など、様々な要因について教育課程を中心に据えながら検討・改善を行い、**教育活動の質を高める**ためのものです。

カリキュラム・マネジメントの4つの側面

※新学習指導要領解説 特別支援学校教育要領 総則編

- ◆ 教育の目的や目標の実現に必要な内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと
- ◆ 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと
- ◆ 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと
- ◆ 個別の指導計画の実施状況の評価と改善を、教育課程の評価と改善につなげていくこと

“4つの側面”を受け、本校では、これまでの研究実践を基に、3つの取組に整理し、日々の授業実践を軸とした研究に取り組むことにしました。そして、マインドマップの手法を活用し、幅広い研究の内容を全職員が俯瞰できるようにし、本校の強みであるチームアプローチにより実践してきました。

研究概要マインドマップ



取組1 カリキュラムの充実

- ◇ 熊大式マネジメントシステムの構築
- ◇ 評価を基にした教育課程の検討及び改善の充実

取組2 授業改善・開発

- ◇ 児童生徒の資質・能力の育成
- ◇ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた視点での授業づくり
- ◇ 日々の授業評価と改善

取組3 地域社会との連携・協働

- ◇ 連携・協働（就職支援ネットワーク会議、社会資源の活用等）
- ◇ 教育課程への反映
- ◇ 情報発信

研究方法

取組1 カリキュラムの充実

- ◆ 効果的で効率的な日々の授業計画及び評価システムを構築し、授業改善や学習状況の評価につなげる。
- ◆ 指導評価や学習状況の評価を積み重ね、教育課程の評価につながるツールの整理と活用を行う。
- ◆ 年間を通した教育課程の評価と改善の時期と、次年度の計画の時期の見直しを図る。

取組2 授業改善・開発

- ◆ 大学教員など専門家との共同研究により、新学習指導要領に示されている教科の目標や内容等から指導内容や方法を検討して授業づくりに生かすとともに、日々の授業評価・改善を行い、主体的・対話的で深い学びの実現を図る。
- ◆ 言語活動の充実や情報機器等の活用の視点を重視して、授業展開や提示方法、協働した活動場面、教材等の工夫を行いながら取り組む。
- ◆ 授業研究会での協議や授業の評価を基に、授業づくりにおけるポイントについて明らかにし、研究の成果を普及させていく。

取組3 地域社会との連携・協働

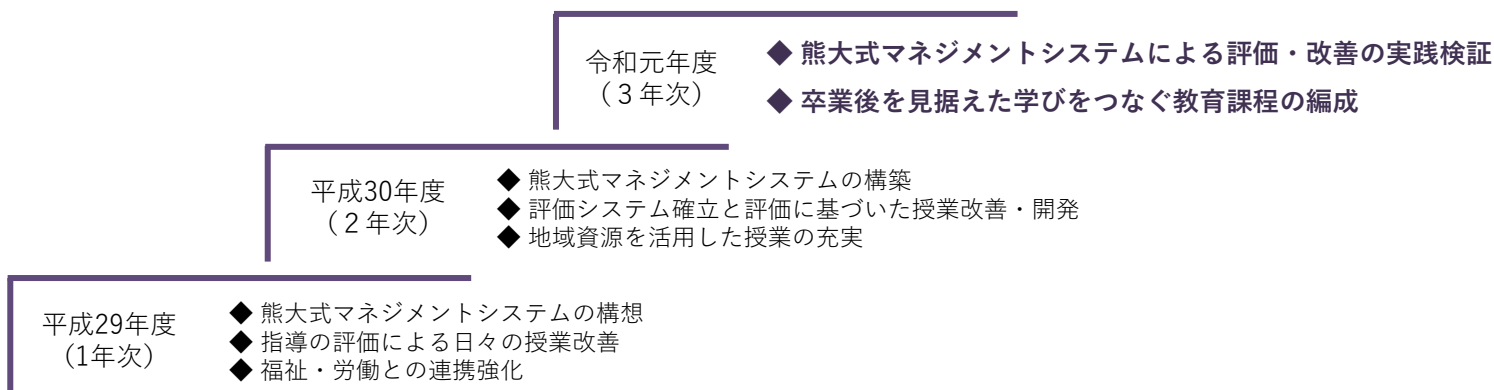
- ◆ 卒業後の生活に関わる教育・労働・福祉等関係者による「附特就職支援ネットワーク会議」を定期的を開催し、本校の教育実践や研究について意見交換を行うとともに、一般企業を対象にしたアンケート（在学中に身に付けてほしい力）等の共同開発実施などに取り組む。
- ◆ 各学部において、地域資源（人的・物的）を積極的に活用するとともに、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりの視点を踏まえ、計画・実践・評価・改善を行う。

研究計画



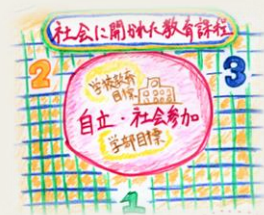
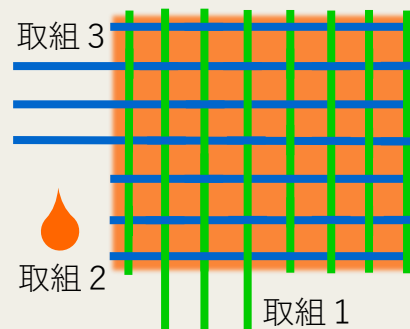
社会に開かれた教育課程の実現に向けて

平成30年度はマインドマップを起点とし、それぞれの取組の充実を図ってきました。最終年となる令和元年度は、教育課程改善へのプロセスとなる熊大式マネジメントシステムの実践検証を行いました。そして、日々の実践である授業を中心として、それぞれの取組を相互に関連付けながら、新学習指導要領の理念となっている「社会に開かれた教育課程」の実現を目指してきました。

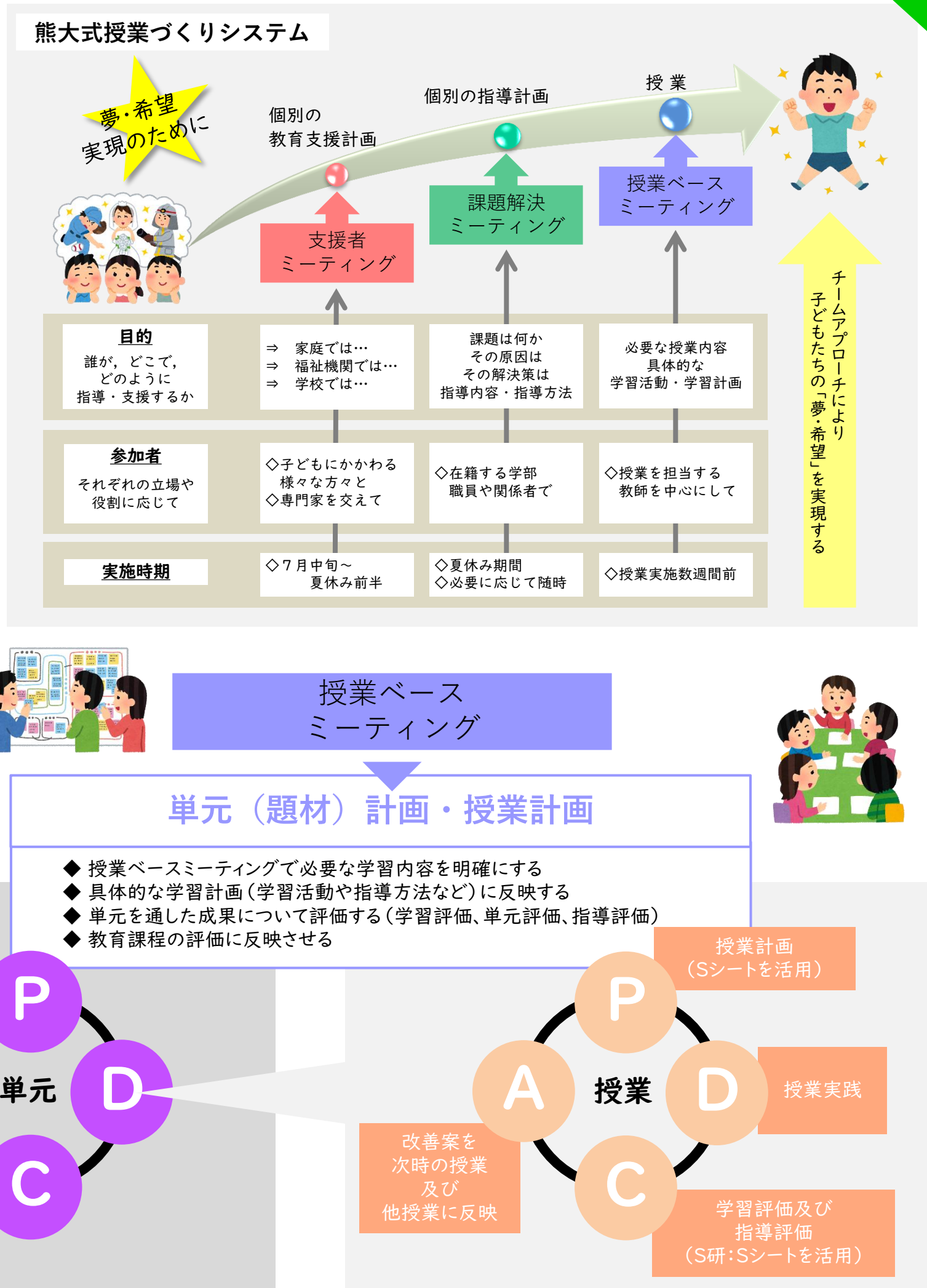
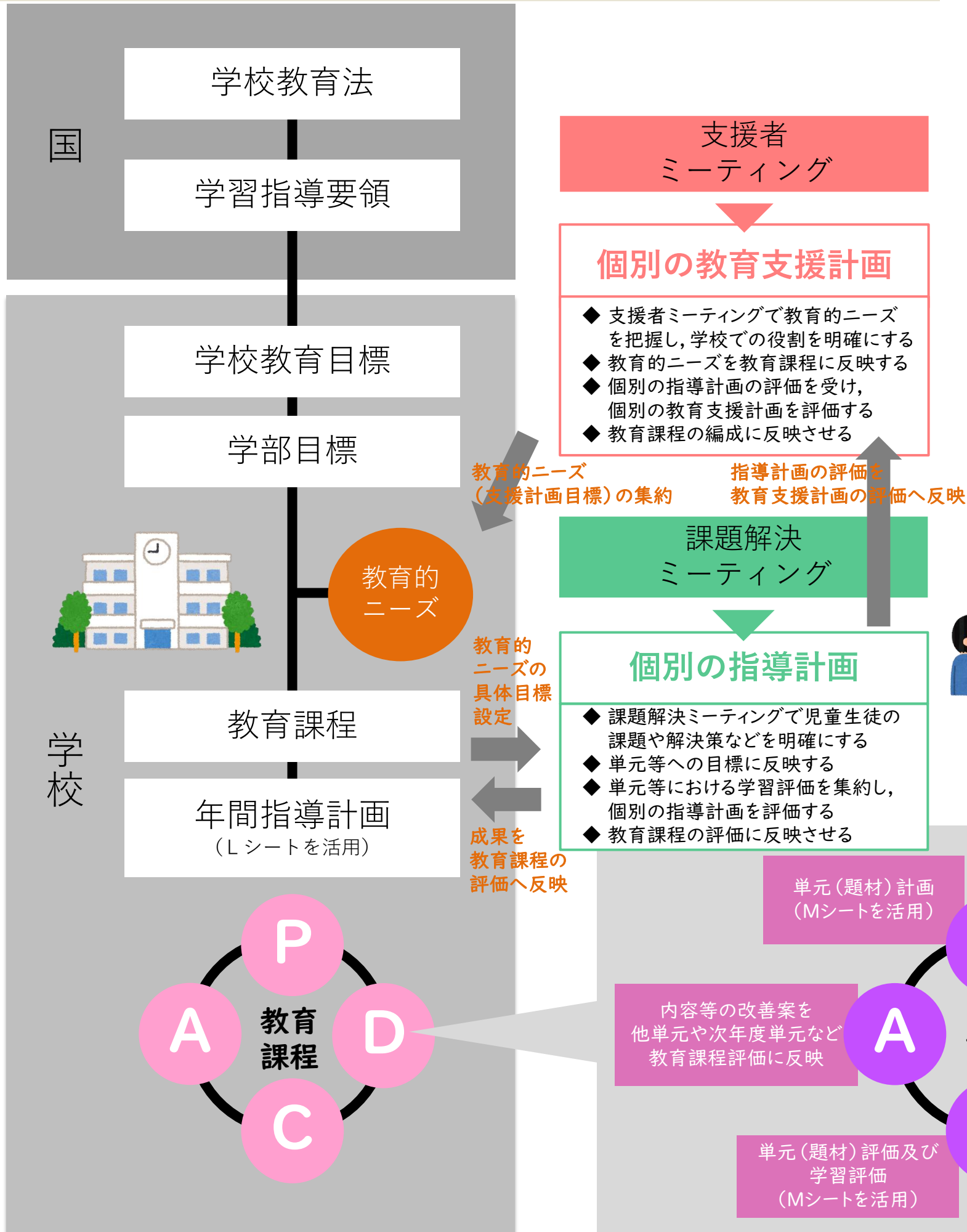


3つの取組の関連付け

取組1の内容である“PDCAサイクル”を縦系、取組3の内容である“学校と社会の連携・協働”を横系とし、そこに取組2の授業改善における質の高い授業を施して織り込むことで一枚の布になるように、3つの取組を有機的に関連させました。



熊大式マネジメントシステム

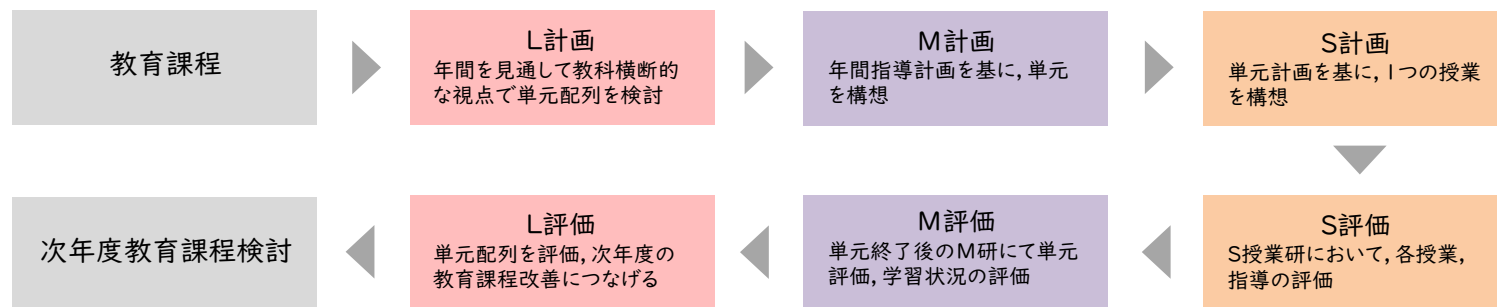


L・M・Sシートの活用

児童生徒の資質・能力を育成していくためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善とともに、「カリキュラム・マネジメント」の充実が重要です。「授業改善」は、1単位時間の授業のみならず、「単元や題材などの内容や時間のまとまり」を意識しながら行います。その単元が年間計画にどのように位置付けられているのか俯瞰していくことで、カリキュラム・マネジメントが機能し、児童生徒の深い学びへとつながると考えます。

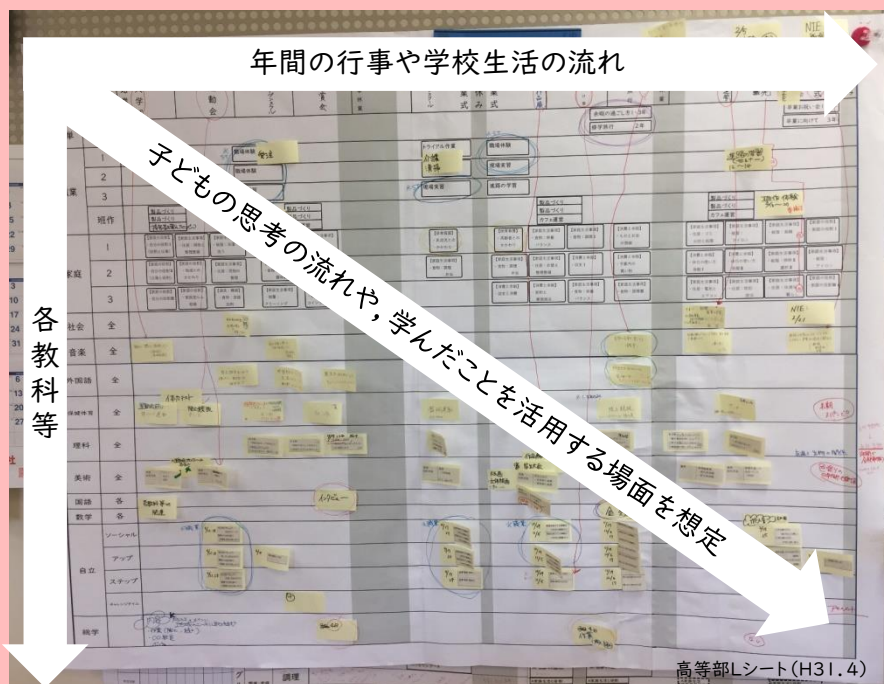
本校では、L (Long)・M (Middle)・S (Short) の3つの段階を設定し、各段階でのシートを効率的・効果的に活用しながら、各教科の特質等を捉えた単元や授業を構想し、授業改善と次年度への教育課程改善につなげてきました。

L・M・S計画・評価の流れ図



Lシート（年間単元配列表）活用の流れ

各教科等の学習内容が網羅されているか、教育課程表の確認後、Lシートにて各単元の配列に取り掛かる。



Lシートにて単元を配列後、教育課程の調整を行い、各教科等の年間指導計画の作成をする。

Lシート活用のポイント

- ◆ 児童生徒の実態・学習経験を配慮すること
- ◆ 前年度のLシートの評価を基にすること
- ◆ どのような資質・能力を育むかの視点を持つこと
- ◆ 教科等横断的な視点を持つこと
- ◆ 弾力的な運用ができる柔軟な計画になっていること
- ◆ 修正や追加、評価、改善等を直接記入すること
- ◆ 地域資源の有効な利活用の視点を持つこと

Mシート（単元・題材構想シート）活用の流れ

Mシート			
学部 期間	学年・グループ	領域・教科等名 単位時間数	記入者
単元名	学習指導要領や各計画、教育的ニーズ等を踏まえ、本単元のねらいや学習内容を整理する。		
学習指導要領			
学習概要			
知識及び技能 思考力、判断力、問題解決力	単元目標の検討 (資質・能力の3観点、教育的ニーズを踏まえる)		
学習計画(教育的ニーズ、育成したい資質・能力等を踏まえて)	ねらいと評価計画		
期日	深い学びに向けて学習の系統性や、生活への般化、他教科等の関連等を踏まえ、目標達成に必要な学習活動や教材・教具、学習の流れ、支援方法などについて検討		
学年	児童生徒 仮名	個別の指導計画と照らし合わせて個別の評価規 準を設定	
	主 知 思 主 知 思		
	主	単元終了後に単元評価を行う。(M研)	
期日	時数	内容	教材
全体を振り返って(成果と次年度への課題)			

Mシート活用のポイント

- ◆ 前年度または前単元の単元評価を基にすること
- ◆ 単元時数に配慮し、Sシートと併せて弾力的に運用
- ◆ 計画・評価ミーティングの実施時期を決めておくこと
- ◆ 単元後の評価と個別の指導計画の評価の共有化

Sシート（授業構想シート）活用の流れ

Sシート			
日時	○年○月○日 ○時○分～○時○分	教科等	MT
本時のねらい	本時のねらいの焦点化		
学習展開	学習展開		
授業づくりのポイント	授業づくりのポイント		
授業後の評価	授業後の評価		

各教科の見方・考え方を添付

S授業研の評価項目を添付

S授業研(放課後15分間、1日1授業)

S授業研のポイント

- ◆ 月行事計画にS授業研の対象授業を入れておくこと
- ◆ 授業改善の視点を重視すること
- ◆ 15分以内を原則とすること

Sシート活用のポイント

- ◆ 授業評価項目や各教科の見方・考え方を添付し、それらを参考として授業を構想すること
- ◆ 授業づくりのポイントに沿って手立てを講じること
- ◆ 授業後の評価は手書きで記入し、ファイリング。評価を積み重ねていき、個別の指導計画の評価へとつなげる

はじめに

カリキュラム・マネジメントを学校全体で進めていくためには、学部間のつながりが重要です。教育課程のつながり、学習内容のつながり、職員のつながり…。ただ、つながりを密にするには、それなりの工夫が必要です。そこで考えたことは、様々なつながりを生む「共通言語」づくりでした。この取組のために、小学部・中学部・高等部から職員が集まって「学部連携班」を立ち上げました。家庭分野の学習の重要性(取組3:在学中に身に付けてほしい力の分析より)を考慮し、今年度、まずは家庭分野に内容を絞った上で、「小学部から高等部まで12年間の学びを継ぎ目なく(シームレスに)つなぐ」という学部連携班のミッションがスタートしました。

学部間の共通言語を用意すれば、つながりが出てくるのではないかな

学部のつなぎ役 | 各学部2名ずつで構成

学部連携班

発足!!

学部間の取組/12年間の学びをシームレスにつなぐぞ!!

おー! シャキーン

共通言語①「育成を目指す資質・能力」のアップデート

一覧表を校内Web掲示板で共有

2016年度作成「児童生徒に必要な『育成を目指す資質・能力』一覧表」の共有がうまくできていなかったので、校内Web掲示板にアップし、意識化

アップデート

2019年時点での「育成を目指す資質・能力」を明らかにするため、本校職員の意見をテキストマイニングで集約・可視化

UserLocal社のAIテキストマイニングを活用

https://textmining.userlocal.jp/

社会生活が近づくにつれ、求めたいことは増える…

各学部段階で大切にしていることを、学部連携班の中で図解で共有・理解

育ちのステージ

自分 他者 社会

身近 わかる 心

小1段階 小2段階 小3段階 中1段階 中2段階 高1段階 高2段階

各学部の学部連携班、校長先生も一緒に

学部連携班で情報共有後に話す中で見えてきたこと

◆小学部、中学部、高等部と段階が上がる毎に、「自分→他者→社会」というように関係性が広がっていく。それに見合った教育課程が必然的に設定されている。

◆12年間通して目指す姿は、「愛される人」

◆学部が変わる毎に大きなギャップが生じていること(中1ギャップ、高1ギャップ)。ギャップを小さくする工夫が大切。

共通言語② 12年間の系統性ある学習内容の検討と整理

「指導内容確認表」を作成・配布

小一中一高の学びのつながりを一目で見るため、指導内容のみを抽出して整理した「指導内容確認表」を作成。職員1人につき1冊、レールファイルに綴じて配布。学習指導要領の文言をそのままコピー＆ペーストでまとめた。全職員が同じツールを持っていて、情報共有が円滑。

12年間の学びをつなぐ 家庭分野

小生活科 中職業・家庭科 高家庭科

家庭科の内容に焦点を置いて、シームレスな12年間の学びのつながりを検討。「12年間の学びのつながりモデル」としてまとめた(右図)。

プレゼン教材をWeb公開中

特別支援教育のためのプレゼン教材サイト

https://musashi.educ.kumamoto-u.ac.jp/

日本教育情報化振興会「ICT夢コンテスト2019」優良賞受賞内定!

PowerPoint教材を簡単機能拡張!「TU Parts」

プレゼン教材をWeb公開中。各学部段階で整理。動画による使用イメージの共有。

04022[算数]0からならんだ数字(0-99)

10003[外国語]大文字⇄小文字アルファベット

04025[数学]分解ものさし

A013:真ん中が回るルーレット

習得 活用 探究

教材のシェア

各学部で活用している教材をシェア。デジタル教材は、共有NAS上のフォルダで。アナログ教材は、保管場所の情報を共有。

ああの教材のデータください

ちょっと探してみますねー

情報共有が次のアイデアを生み、学びもつなぐ

見えてきたこと

◆例えば中学部3年生の頃に活用していた教材を、高等部1年生でも活用、という教材のシェアは、学部間ギャップの起こる中学部1年生や高等部1年生では有効。

◆教材のシェアを実現するために、場所づくりと雰囲気づくりは有効。

共通言語を増やす→教員間の意識をつなぐ→学びをつなぐ

「〇〇を身に付けるのに◇◇といった学習が有効」を明らかにしていく

教科研究会の実施 具体的な進め方の提案(タイムマネジメント含む)

シェアしている情報を周知。学部連携班→学部職員。風通しよくするシステム。

つなぐ意識が高まった今からが大事

今後の方向性

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善と開発

児童生徒の資質・能力を高めたり、拡げたりしていくためには、これまでの知的障がい教育で重視してきた児童生徒の学ぶ意欲や主体性を大切にしながら、思考力・判断力・表現力等を高める授業改善・開発が必要です。ただ、障がい上の特性や発達段階などにより、思考したり、判断したり、表現したりすることへの困難さがある児童生徒について、障がいの状態等に留意しつつ、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すとともに、これらの困難さに対応しながら、学びの過程の質的改善を行うことが求められます。

本校では、大学教員など専門家との共同研究により、教科特有のポイントを捉え、何を（学習の内容）をどのように学ぶ（学習の過程）のかについて検討し、質の高い授業づくりを目指してきました。

小学部 国語科

単元名「言葉を楽しもう！」

言葉に焦点を当て、実際に体験したり、動作化したり、本やタブレット等で調べたりして言葉とイメージを結び付けてから、その言葉を使った簡単な文章を作りました。児童それぞれの体験や感情が表れた「豊かな表現」が見られました。



国語
仁野平智明
准教授

言葉を発信する「話す」「書く」活動により、児童の言葉を豊かにしようという授業実践である。生活実感をともなった言葉を獲得する過程において、言葉の認識的側面・表現的側面に関する能力を伸長できたものと思われる。

特別支援教育
菊池哲平
准教授

知的障がい児にとって国語科は、自らを取り巻く環境を「言語」を媒介にして表現するという、社会との関わりの第一歩となる教科である。小学部からの丁寧な「国語」の授業づくりが、児童の未来を作る基礎となると考える。

小学部 性教育

題材名「すてきなおいさん・おねえさんになろう」

プライベートゾーンの役割や触られた人の気持ちを考え、基礎基本の定着を図りました。触ってはいけない部位がわかるようiPadでタッチクイズを行ったり、気持ちが盛り上がる場面を設定したりすることで、楽しみながら意欲的に授業に参加できました。



養護教育
久保昌子
教授

特別支援学校の性教育は、冬の時代を経て、その重要性が再認識されるようになった。性教育は生涯に関わる教育であり、そのスタートが小学部と捉えている。保護者との連携を欠かさず、児童の個々の発達や疑問に応え、教員が共通理解をしながら具体的な教材を創っている。それが、本校の性教育の構築に繋がると考える。

中学部 特別の教科 道徳

題材名「友達と自分の違いについて知ろう」

自分の上靴の色について触れ、どうしてその色を選んだのか問いながら、自分が本当に好きな色は何なのか、実際にスニーカーのイラストに色を塗り、互いに見せ合いました。選んだ理由を述べていく中で、自分の意見が友達とはの考えや意見とは違うことに気付く様子が見られました。



道徳教育
今井伸和
准教授

生徒の内面の気持ちを教師が代弁したり、考えを整理したりする翻訳的な支援が素晴らしい。翻訳とは、教員が当て推量に生徒を解釈するものではない。生徒をよく知る教員が、生徒の証言不可能性に触れ、生徒の思考を証言するものである。証言不可能性における証言可能性が見て取れる。

発達心理学, 教育心理学
高崎文子
准教授

発達段階や特性が多様な集団における道徳教育の指導を工夫する中で、各生徒の発達に合わせた変化を丁寧に見取り、エピソードを集積することで、評価指標の作成のための基本的枠組み作りにも寄与する研究である。

特別支援教育
本吉大介
准教授

道徳教育における従来の教材観にとらわれない、知的障がいの特性を踏まえた柔軟な授業づくりのガイドラインとなる研究である。発達の状況は多様でありながらも集団の良さを活かした授業展開は、インクルーシブ教育の在り方に示唆を与えてくれる。

中学部 数学科

単元名「ラグビー優勝国予想」

リーグ表の勝敗表や得失点の結果から、どのチームが優勝するかを予想しました。各リーグの順位や得失点の差などに着目して、自分なりに理由を考えて予想結果を発表することができました。

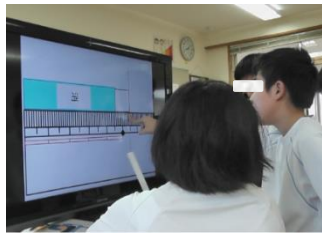


数学
吉村 昇
准教授

数学学習の系統性に基づき授業計画を立て、生徒の発達段階に応じて、数学的見方・考え方を働かせて数学の概念獲得や数学の活用を目指した授業づくりをしている。このような授業づくりがこれから求められてくるものではないだろうか。

単元名「測ってみよう」

cm, mmの長さの目盛の読み方の学習を行いました。測る物の端が位置している目盛の読み方を学ぶ内容で、ICTを活用した独自教材を開発して授業を行いました。mm単位の理解は繰り返しの学習が必要であることが確認されました。



特別支援教育
菊池哲平
准教授

これまで知的障がい教育における「算数・数学」は実務的な内容が重視され、必ずしも教科の本質に迫ったものではなかった。今回、中学部で取り組んだ「数学的な見方・考え方」を目指す授業のあり方は、知的障がい教育の大きな転換点になると考える。

高等部 家庭科

単元名「異年齢の人とかかわろう」

疑似体験用の装具を用いて、体の不自由な高齢者の体験を行いました。見る、聞く、歩く等で困っている高齢者役の生徒に対して、支援者役の生徒が相手の状況を見ながら自分にできることについて考え、相手と同じ目線で話しかけたり、優しく手を差し出したりすることができました。



家庭
八幡彩子
教授(本校校長)

よりよい生活を創るための知識と技能、考え方の確実な習得とともに、自分でおいしい食事を作ろう、幼児や高齢者と楽しく関わろう、とする意欲（学びに向かう力）がなければ、生活に生きて働く力とならない。他教科等との連携を密に、家庭生活以外の活用場として職業（福祉、生活産業等）も視野に入れたカリキュラム・マネジメントを期待する。

高等部 職業科

単元名「自分の『わくわくライフ』を考えよう」

生徒自身が卒業後の夢や生活を具体的に想像し、「働きたい」という気持ちを育むことを目指しました。将来の姿をイメージし、今の自分について見つめ直し、学校生活や家庭生活でのより具体的な目標を考えることができました。



附特就職支援ネットワーク委員
山田浩三氏
(アス・トライ就労移行支援事業所代表)

生徒の皆さん一人ひとりが、目を輝かせながら、自分の将来（夢や生活など）について夢中になって考え、言葉に書き綴り、発表する姿が印象的だった。その想いを叶えるために日々の生活で実践されることを期待する。

高等部 自立活動

題材名「自分の課題にチャレンジしよう」

自分を知る、作業環境を整える、作業と休憩の切り替えをするなど、自分の課題と向き合いました。卒業後の生活につながるように、個の課題を落とし込む授業づくりをしてきたことで、今の自分に「必要なもの・こと」に気付くことができるようになりました。



特別支援教育
本吉大介
准教授

研究成果である就労アセスメントを活用した自立活動の課題設定とグルーピングを行った高等部らしい研究である。新たな項目である「障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること」について、活動を通して生徒たちが自分に必要な環境や支援について試行錯誤しながら考えることがポイントである。

附特就職支援ネットワーク会議の取組

～「在学中に身に付けてほしい力」を基にした
教育・労働・福祉の関係機関が連携・協働した取組～

目的

「卒業後を見据えた学びをつなぐ教育課程の編成」の実現に向け、卒業後の生活に関わる教育・労働・福祉関係者による「附特就職支援ネットワーク会議」を開催し、在学中に身に付けてほしい力に関する検討を行うとともに、その結果を踏まえた教育・労働・福祉の関係機関が連携・協働した取組を実施し、その成果を検証し、カリキュラムの充実・改善に繋げることを目的としました。

附特就職支援ネットワーク会議の組織

卒業後の生活に関わる労働・福祉関係者（以下、附特就職支援ネットワーク会議委員）と、本校職員（管理職、学部主事、進路指導主事、教務主任、研究主任）で構成し、「附特就職支援ネットワーク会議」を年3回開催（H28年度～R元年度）。

附特就職支援ネットワーク会議委員 令和元年度

- ◆ くまもと障がい者ワーク・ライフサポートセンター縁（主任支援ワーカー）
 - ◆ アス・トライ 就労移行支援事業所（代表）
 - ◆ 熊本県中小企業家同友会（障がい者雇用支援委員会 委員長）
 - ◆ チャレンジめいとくの里ゆめくらしワークス事業部（サービス管理責任者）
 - ◆ 社会福祉法人ライン工房（総括施設長）
- ◆ 熊本市障がい者相談支援センターじょうなん（センター長）
 - ◆ 熊本障害者職業センター（主任障害者職業カウンセラー）
 - ◆ 社会福祉法人三気の会相談支援事業所たんばぼ（熊本時習館特別支援相談員）
 - ◆ NPO法人KP5000（代表）

附特就職支援ネットワーク会議委員との協働した取組

一般企業を対象とした資質・能力に関するアンケートを共同開発し、そのアンケート結果と、卒業生の現状等を踏まえて附特就職支援ネットワーク会議委員との連携・協働した取組を実施する。

社会から見た在学中に身に付けるべき資質・能力に関する調査

「在学中に身に付けてほしい力」アンケート

本校卒業生が就職した一般企業と、就職支援コーディネーターが職場開拓で訪問した「障がい者を雇用している」又は「これから障がい者雇用を検討している」一般企業を対象に、在学中に身に付けてほしい力についてアンケート調査を実施する。

卒業後の「フォローアップミーティング」

本校卒業後3年・6年・10年目の卒業生を対象に、本人・保護者・就労先の担当者・関係機関や学校担当者が一堂に会して現状を共有し、今後の支援や役割分担を確認するフォローアップミーティングを実施し、状況の数値化と聴き取りの結果を記す。

附特就職支援ネットワーク会議における検討・協議

授業の開発

調査結果を基にした学習内容の改善、及び関係機関と協働した授業づくり

研修会等の開催

卒業後の働く生活を見据えた研修会や放課後の教員向け研修会の開催

生涯学習の場の検討

卒業生、在校生、保護者などを対象とした学習教室の開催

地域支援

地域の小中高等学校への進路・就労支援や「教育プラグ」の開発と運用

研究計画

平成28～29年度

- ◆ 「在学中に身に付けたい力」アンケート項目の検討
- ◆ 協働した取組
- ◆ 授業参観

平成30年度

- ◆ アンケート調査・回収・検討
- ◆ 協働した取組
- ◆ 附特就職支援ネットワーク会議の未来の作戦会議（PATH）

令和元年度

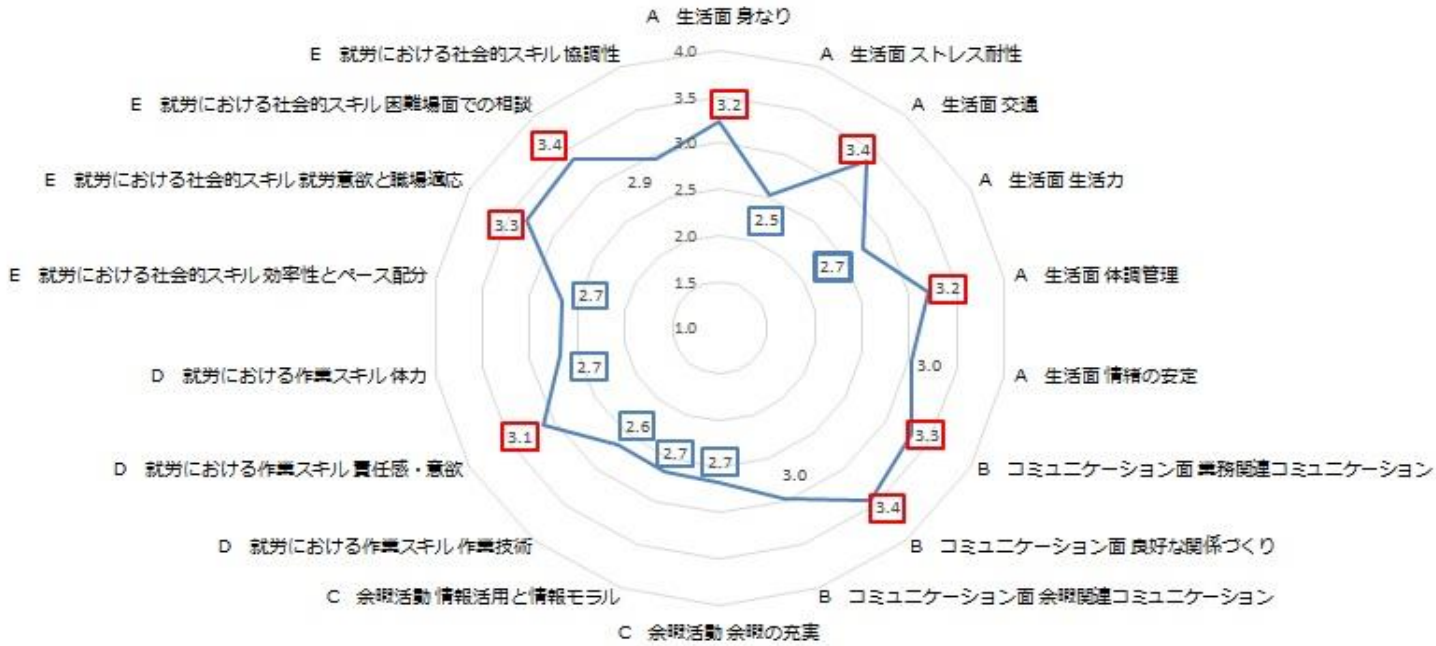
- ◆ 研修会検討・準備・実施
- ◆ 授業開発
- ◆ 協働した取組
- ◆ 実践のまとめ

調査結果 「在学中に身に付けてほしい力」アンケート

◇ アンケート内容はH28年度に開発した「附特就労アセスメントシート」を基に、「生活」「コミュニケーション」「余暇活動」「就労における作業スキル」「就労における社会スキル」の5観点76項目の4段階評価及び記述式で実施。

評価基準	4点「在学中に身に付けてほしい」 2点「どちらかといえば卒業後でかまわない」	3点「できれば身に付けてほしい」 1点「卒業後でかまわない」
------	---	-----------------------------------

統計解析に基づき、アンケート項目を大区分に整理 / 140社へ依頼し、100社から回答



- A 生活面【身なり】【交通】【体調管理】

D 就労における作業スキル【責任感・意欲】
- B コミュニケーション【業務関連コミュニケーション】【良好な関係づくり】

E 就労における社会スキル【勤労意欲と職場適応】【困難な場面での相談】

「在学中に必ず身に付けてほしい」「在学中にできれば身に付けてほしい」の回答が多い項目

生活面

- ◆ 規則正しい生活ができる
- ◆ 欠勤、遅刻、早退などがない
- ◆ 交通ルールを理解している

コミュニケーション

- ◆ 自分から挨拶ができる
- ◆ 相手に聞こえるように返事をする
- ◆ 体調不良を訴えることができる

就労における社会スキル

- ◆ 困っているときに誰かに助けを求めることができる
- ◆ 会社のルールやマナーを守ることができる
- ◆ 働きたいという気持ちがある

「どちらかといえば卒業後でもかまわない」「卒業後でかまわない」の回答が多い項目

生活面

- ◆ 電話対応ができる
- ◆ 法律や制度を理解している
- ◆ ストレスに強い
- ◆ プレッシャーに強い

余暇

- ◆ 休みの計画を立てることができる
- ◆ 情報を収集したり活用したりすることができる

就労における作業スキル

- ◆ 手先が器用である
- ◆ 情報機器を使用して作業を行うことができる
- ◆ 重たいものを持ったり、動かしたりする体力がある

就労における社会スキル

- ◆ 相手のペースに合わせることができる
- ◆ リーダーシップを発揮して作業することができる

記述式での意見（一部抜粋）

【在学中に身に付けてほしい力】

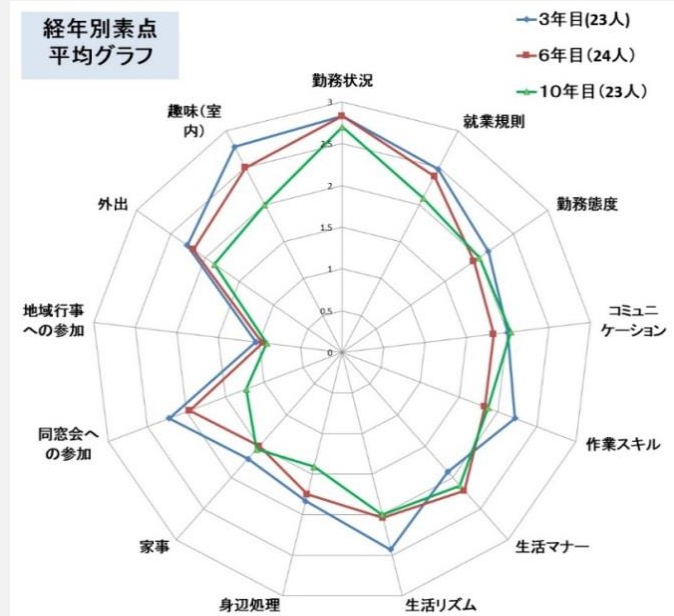
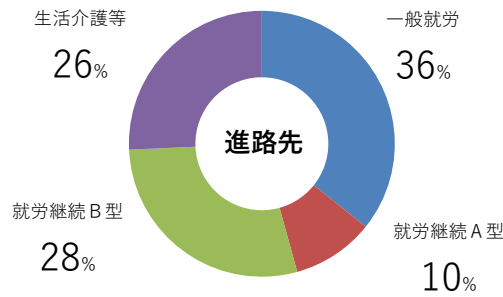
- ◆ 感謝の気持ちや素直な心
- ◆ 仕事に真面目に誠実に取り組む姿勢
- ◆ 社会に出て役立つ具体的・実践的な力
- ◆ 我慢する力 ◆ 体調管理 ◆ 会社と学校の違い

【10年後に必要な力】

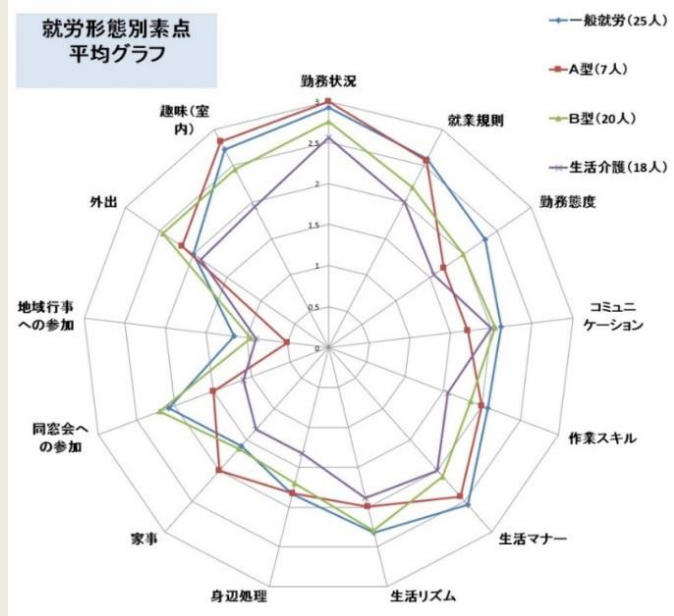
- ◆ コミュニケーション力 ◆ 想像力 ◆ 自立心 ◆ 自己理解
- ◆ 情報機器を活用する力（情報処理能力） ◆ 自己肯定感
- ◆ キャリアアップを目指す意欲 ◆ 状況判断能力
- ◆ サービス力（接遇、待遇、マナー）

調査結果 卒業後の「フォローアップミーティング」

対象卒業生									計
卒業後10年			卒業後6年			卒業後3年			
h18年	h19年	h20年	h22年	h23年	h24年	h25年	h26年	h27年	
7人	8人	8人	9人	8人	7人	8人	8人	7人	70人
男(13) 女(10)			男(14) 女(10)			男(13) 女(10)			男(40) 女(30)



- ◆ 「地域行事への参加」が全体的に低く、「外出」「同意会への参加」が年々低くなっており、仕事以外の外出の機会が次第に減っている。
- ◆ 卒業後、次第に「趣味(室内)」や「家事」「身辺処理」が低くなっている。また、「作業スキル」「生活リズム」も3年目以降低くなっている(生活や仕事のマンネリ化)。
- ◆ 「生活リズム」は向上(社会人としての経験の積み重ね)。



- ◆ 一般就労者は「外出」、A型利用者は「勤務態度」や「コミュニケーション」、B型利用者は「作業スキル」や「生活リズム」、生活介護利用者は「趣味(室内)」が課題。
- ◆ 全体をととして「外出」「身辺処理」「家事」「コミュニケーション」「作業スキル(キャリアアップ)」が課題。

卒業後に課題を抱える卒業生が多く、在学中に身に付けておくべき力

- ◆ 余暇生活力【趣味・外出・地域行事への参加】
- ◆ 家庭生活力【身辺処理・家事・生活リズム】
- ◆ キャリアアップの意欲
- ◆ コミュニケーション力

考察

- ◆ 在学中に身に付けてほしい力について、卒業後の社会生活から明らかにしていくことで、**授業改善**を含む**カリキュラム・マネジメント**の推進につなげることができると考えます。
- ◆ 卒業後の生活を支援している**関係機関の視点**も含めて授業づくりをすることで、児童生徒の**学びを深め、卒業後の生活につなげることができると考えます。**
- ◆ 地域の関係機関と連携・協働し、教員・保護者等の支援者向けセミナーを開催したり、生涯学習の場をつくったりすることで、障がいのある児童生徒の**育つ地域環境の整備や開発**につなげることができると考えます。
- ◆ 高等学校や企業等への地域支援をととして、**インクルーシブな視点**から、小・中・高そして社会生活を見据えた学びの連続性を整理していくことにつながるとともに、特別支援教育のノウハウを**地域の学校や社会へ発信**していくことができると考えます。

連携・協働した取組実施とその成果検証 平成28年度～令和元年度

授業開発

高等部「職業科」におけるライフキャリアの授業開発

高等部職業科「わくわくライフ」
 アス・トライ就労移行支援事業所の山田氏と、職業科の授業において授業を開発・実施。「働く生活」だけでなく「家庭生活」「余暇生活」の視点で本人の夢・希望を整理し、それに向けた目標設定を行う等して、生徒たちの働く意欲を高めることができました。



高等部職業科「親子職業セミナー」
 NPO法人KP5000の原田氏と「働くことと『余暇』について考えよう」というテーマで親子職業セミナーを開催。親子で「余暇生活」の視点から卒業後の生活を考えることができました。



高等部「自立活動」における教材等の開発

本校で附特就職支援ネットワーク会議委員と開発した「附特就労アセスメントシート」を基に自立活動のグループ分けを行うツールを開発。また、自己理解のグループにおいて、熊本障害者職業センターにおける職業準備支援の「ナビゲーションブック」を参考に、自分のことを整理した「私のトリセツ」を作成・活用することができました。



- ◆ 授業における専門的な人材の活用
- ◆ 卒業後の社会生活の視点からの授業開発

生涯学習の場の検討

同窓会活動における「学びの教室」の開催

本校同窓会すずかけの会において「学びの教室」を開催。卒業生がスポーツ、音楽、創作等の9つのグループに分かれて活動に取り組みました。エクササイズグループにおいては、NPO法人KP5000にコーディネートしていただき、講師の方をお招きしたことで有酸素運動等の本格的なエクササイズ活動に取り組み、充実した活動となりました。



児童生徒・保護者・教員対象のワークショップの開催

NPO法人KP5000主催で本校の児童生徒・保護者・教員を対象に「アロマハンドマッサージワークショップ」を開催。2名の講師の方々にお越しいただき、アロマハンドマッサージのやり方を教えていただきました。その後ペアになってワークショップ形式で実施しました。児童生徒だけでなく、保護者や教員も一緒にワークショップに参加し、楽しむことができました。また、アンケートでは余暇活動の充実の観点から今後もぜひ参加したいという意見が多数挙げられました。



- ◆ 地域の関係機関と連携・協働した地域資源の開発
- ◆ 児童生徒の生涯学習の意欲向上

研修会等の開催

「卒業後の働く生活を描くセミナー」の開催

障がいのある方の「働く」「暮らす」の支援を行う3つの社会福祉法人と協働し、卒業後の「働く生活」の実際について知っていただき、子どもたちの将来がより具体的にイメージできるようになることを目的として、H29年度からセミナーを開催。毎年、熊本県内外より約300名の方々に御参加いただいています。



「すずかけイブニングセミナー」の開催

H28年度より年5回シリーズで「すずかけイブニングセミナー」を開催。今年度は附特就職支援ネットワーク会議委員の方々等に講師として講話していただきました。また今年度の第3回はサマーセミナーとして開催し、「就労支援」をテーマとしたグループでは、本校の「就労サポートすずかけ」と附特就職支援ネットワーク会議委員の4事業所でボースターセッション形式でセミナーを開催し、教員や保護者等と「支援機関との連携のあり方」について意見交換を行うことができました。



- ◆ 家庭における保護者の支援力の向上
- ◆ 教員のキャリア発達支援のスキル向上

地域支援

地域の高等学校等への就労・生活支援

就労相談窓口「就労サポートすずかけ」を開設し、校内外の相談窓口を明確にするとともに、校内のキャリア教育・就労支援や卒業後のフォローアップ体制の充実に取り組んでいます。また、そのノウハウを地域の小中高等学校等への進路・就労支援へ活用し、センタリツ機能を発揮しています。

高等学校等への支援例

- ◆ 就労相談や本人のアセスメント
- ◆ インターンシップ先の案内やサポート
- ◆ 障がい福祉サービスや支援機関の情報提供
- ◆ 就労支援に関する研修会の開催

過去4年間の実績

- ◆ 本校支援エリアの高等学校生徒8名の就労支援
- ◆ 市内ブロック研修や高等学校の校内研修、企業の障がい者雇用に関する社内研修での講話等

「教育プラグ」の開発と運用

NPO法人KP5000と協働して、障がいのある児童生徒の進路に関する情報提供を行う「教育プラグ」を開発。障がいのある児童生徒や保護者・教員が卒業後の生活をイメージしながら進路選択や進路支援ができるような内容を検討し、作成。今後、進路支援に関する情報発信のツールとして運用する予定です。



- ◆ 研究成果の地域への情報発信
- ◆ インクルーシブ教育実現に向けた様々な障がいのある生徒の支援事例の蓄積や企業のニーズ把握

まとめ

社会や職場から在学中に身に付けてほしいと求められている力や卒業生の様子から、在学中に身に付けておくべき力を基に、教育・労働・福祉の関係機関が連携・協働した取組を実施。

障がいのある児童生徒の卒業後の地域社会における自立と社会参加を見据えた卒業後へ学びを繋ぐ授業・カリキュラムの実現と、児童生徒が学び・育つ地域づくりへ。

地域資源の活用から協働へ

これまで各学部では、周りにある貴重な地域資源（人的、物的、環境）を活用し、取組2「授業改善・開発」と関連させながら、主体的・対話的で深い学びの実現につなげたことで、児童生徒の学習効果が高まってきました。また、地域の方との関係が深まることで、本校の教育活動や障がいへの理解啓発につながってきました。

令和元年度は、児童生徒のさらなる学びの広がりや深まりと、社会に開かれた教育課程の実現に向けて、年間指導計画や単元（題材）計画を立てる段階で、地域資源との協働を視野に入れ、他教科との関連や教科間の連携などを図り、教科横断的な視点で地域と協働した授業づくりに取り組んできました。

昨年度

今年度

次年度へ

学習に有効な地域資源（人的・物的・環境）を活用した実践に取り組むことで深い学びにつなげる。

方法

- ◆ 地域資源とその活用方法のリストアップをする。
- ◆ 取組2と関連させ、地域の価値ある資源を活用する。

①地域との協働した授業づくりを行う。
②協働した授業の教育効果について評価し、カリキュラム・マネジメントへ反映する。

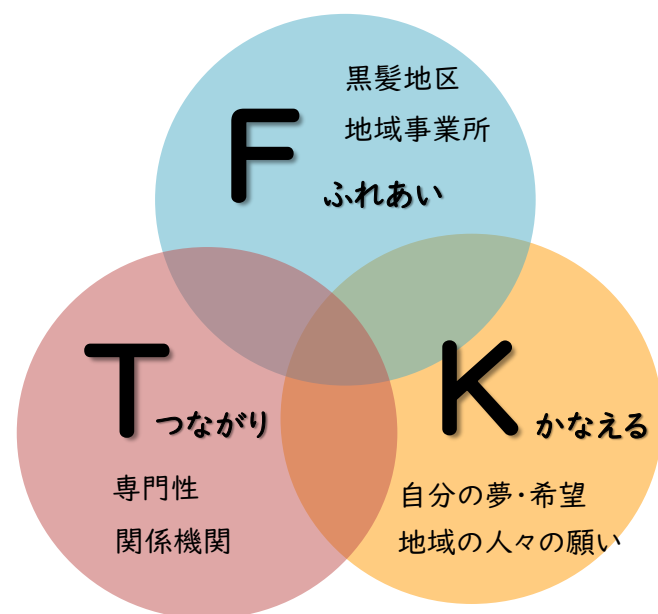
方法

- ◆ 年間指導計画を立てる際に1つの視点として、地域との協働を視野に置き、教育効果を高める授業づくりの在り方について検討する。
- ◆ Lシートを基に、教科横断的な視点で単元計画や授業づくりを行う。
- ◆ PDCAサイクルで授業の計画から評価までを行う。地域資源の活用と協働した授業づくりによる効果を評価して、カリキュラム・マネジメントへ反映する。



Lシートを基にPDCAサイクルで授業の評価を行いました。

地域社会と連携・協働した授業実践



地域と協働した授業づくり

- ◆ 本物に触れる機会の提供
- ◆ 専門的な知識や技能をもつ人材の活用



社会への啓発

- ◆ 本校の教育活動への理解
- ◆ 障がい理解



目的

- ◆ 音楽表現を楽しむために必要な器楽、歌唱技能を身につける。
- ◆ 曲や演奏の楽しさを見いだしながら、音や音楽の楽しさを味わう。
- ◆ 音や音楽に楽しく関わり、音楽経験を生かして生活を楽しめるものにしようとする態度を養う。

授業づくりの工夫

地域資源と協働した授業づくり

- ◆ 児童が意欲的に音楽会に臨むために、事前にインタビューやポスター渡しなどができる訪問の機会
- ◆ 慣れない場所での活動が不安な児童もいるため、前日の会場の下見時間の調整
- ◆ 施設の方からも、「子どもたちが来てくれると利用者の方が喜ぶ」というお話から、十分な活動時間の提供



インタビューを行っている様子



歌詞カード作りに取り組む様子



完成したポスター等を届ける様子

教科の連携

【音楽】「利用者の方により伝わるようにするにはどうするか（歌い方や演奏の仕方等）」について考える場面の設定
【国語】歌のリクエストインタビュー（高学年）、音楽会のポスター作り（中学年）、音楽会のプログラム作り（低学年）
【算数】歌のリクエスト結果の集計（高学年） 【図工】歌詞カード作り（低学年）

学習の成果

- ◆ 前日の下見やインタビュー、ポスター渡し等で複数回訪問することで、安心して音楽会に臨むことができました。
- ◆ 事前に利用者の方に来て直接リクエストを聞くことで、「おじいちゃんおばあちゃんに聴いてもらう」という児童の意識や意欲が高まり、器楽、歌唱技能を身につけて音楽表現を楽しむことができました。
- ◆ ポスターやプログラム、歌詞カード等の作成を通して、音楽会を楽しみにする姿が見られました。
- ◆ 発表会で利用者の方が喜ばれる姿を間近に見ることで、発表することに自信をもったり、音楽の楽しさや発表する喜びを感じたりする様子が見られました。

学びの深まり

小学部1年女児

【学習前】人前で発表することに苦手意識がありました。

【学習後】音楽会での経験が自信につながり、自ら発表しようとするが増えました。その後の学校行事「すずかけ祭り」のステージ発表では、自信をもって中心で踊ることができました。

小学部5年男児

【学習前】合唱や演奏をすることには意欲的に取り組んでいましたが、単元のゴールである音楽会で、「利用者の方々に楽しんでもらえるような発表をする」という目的までは意識できていない様子でした。

【学習後】音楽会での「利用者の方のために発表する」という経験を通して、関わる相手や目的等を考えるようになりました。「すずかけ祭り」では、「来てくれたお客さんにお土産を準備しないと」と発言する姿が見られました。



目的

- ◆ 公共交通機関の乗降車の方法やマナーを理解し、実際の対応を身に付ける。
- ◆ 余暇活動に資する公共交通機関・公共施設を活用する。



協働した授業づくり

産交バスの方には、バスの乗降練習だけではなく、紙芝居などによって、バスに乗るときのマナーや注意点などの説明をしていただきました。また、バスの設備や車いすの乗車の仕方などの体験的な活動も用意していただきました。

学習展開と学習の効果

社会

総合的な学習の時間

校内での模擬乗車練習



ICTを活用し、教室内でバス車内を見立てた乗降練習

実際のバスでの乗降練習



バス会社の協力で、校内で本物のバスを活用した乗降練習

路線バスでの乗降練習 乗り過ごした時の対応学習



校内での学習をもとに実際に路線バスで乗降練習

路線バスを活用した校外学習



生徒の居住地や実態等、班編成し、各班に応じた学習を展開

校外学習に向けての調べ学習（総合的な学習の時間）

令和元年度は、バスターミナルのリニューアルと、サクラマチクマモトという複合商業施設の開業に伴い、登下校にかかわる時刻表の確認や乗降口の確認を行いました。また、余暇の充実に向けて、カフェ班、ショッピング班、乗り物班に分かれて、見学や昼食などについて計画し、前時の社会科での学びを活用して校外での学習に取り組むことができました。

学びの深まり（事例 中1男子生徒）

学習前

入学後は保護者送迎で、登下校をしていました。7月の支援者ミーティングにおいて、「大好きなウルトラマンのグッズが売ってある店まで買い物に行きたい」という本人の希望があり、一人でバスを利用できることを3年後の目標に掲げました。その後、学校へは登校時のみバスを利用できるようになりましたが、バスターミナルのリニューアルに併せて、時刻表の変更等もあり、バス利用についていくつかの課題がありました。

学習後

校外学習では、バスターミナルで、時刻表や乗降口の場所の確認、乗り継ぎの場所の確認等を行いました。単元終了後は、保護者と3回練習を行い、今では乗り継ぎを含めてバスを利用し、登下校ができるようになりました。そのことが、本人の自信と保護者の安心につながり、サクラマチクマモトまでバスを利用して一人で出掛けたり、バスターミナルで乗り継ぎをしたりして出掛けたいという言葉が本人から聞かれたりするようになりました。

バス会社より

本校で乗り方教室を行う主な目的

- ◆ 講座を通じて路線バスの利用機会を作り出すこと
- ◆ 障がいのあるお客様と直に触れ合うことで、障がいのある方への理解と対応力が深まること
- ◆ 公共交通機関としての地域貢献
- ◆ メディアを通じた企業イメージの高揚

まとめ

乗降の技能に関しては、繰り返しの学習により着実に身に付けることができています。ただ、「降ります」「隣に座ってもいいですか」などと、相手に伝えるコミュニケーションスキルや、席の優先席や乗車マナーの理解、ICカードの残高の読み取りや金銭の捉えなど、生徒一人一人の課題も見えてきました。本単元のみで終わらず、他教科、領域等横断的な視点で今後も指導・支援にあたっていきたいと考えます。また、バス会社との協働的な取組も継続していききたいと考えます。

目的

- ◆ 知的障がい特別支援学校における限られた社会科の授業時数の中で、効果的に主権者としての「知識・技能」や「意識」を生徒が身につけるための「3年間を見通したカリキュラム開発」を行う。
- ◆ 学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくいという知的障がいのある生徒に対して、選挙の仕組みの理解、主権者意識の醸成、高まりを効果的に促す取組を地域資源の活用によって行う。

平成30年度の取組

熊本日日新聞社NIE班との連携



- ◆ 情報収集するツールとして新聞を活用する

熊本市議会の見学



立法権

- ◆ 実際に議会を見る
- ◆ 生徒会行事の提案、審議

熊本市選挙管理委員会による出前授業



- ◆ 熊本市選挙管理委員会からの講話と模擬投票

令和元年度の取組

N I E 実践指定校（1年目）

- ◆ 情報収集ツールとしての新聞活用
- ◆ 知的障がい特別支援学校における新聞活用事例の収集



NIEタイム

他教科と関連付け、学習の効果を高めていく



数学

理科

体育

司法書士会との連携

司法権

- ◆ 法律（きまり）の必要性の理解
- ◆ 「法解釈」について学ぶことにより、合理的な決定（自己選択、決定のプロセス）を体験



生徒の感想

- ◇ みんなが違う解釈で面白かった。機会があったら、また法律のことを学びたい。

熊本市選挙管理委員会による出前授業

- ◆ 選挙の必要性の理解
- ◆ 模擬投票による自己選択、決定のプロセスを経験



生徒の感想

- ◇ 自分の考えをもって投票することが大切だと思う。
- ◇ もっとニュースや新聞を見て選挙に行こうと思う。

令和2年度の取組

N I E 実践指定校（最終年度）

- ◆ 令和元年度の取組を深化させ、各教科での新聞活用→情報収集能力の向上

九州財務局との連携

行政権

- ◆ 予算の編成について学ぶことにより、行政システムについて知る

熊本市選挙管理委員会による出前授業

- ◆ 3年間継続した取組により、理解度の向上

まとめ（令和元年度の実践より）

- ◆ 「主権者意識の醸成、高まり」を目指すカリキュラムの在り方としては、3年間で立法・司法・行政の三権について学ぶようにすることと、3年間継続して選挙制度等を学ぶシステムを合わせて行うことが効果的であると考えます。
- ◆ 幅広い情報の収集やメディアリテラシーについて学ぶ意味で新聞を活用することは効果が高いと考えられます。
- ◆ 地域資源を活用することで、三権分立や政治システム等についての理解を促しやすいと考えます。
- ◆ 令和2年度のNIE実践報告と合わせて本研究をまとめていきます。

研究方法③ 他の学習場面等での行動の変容を捉える【総括的評価】

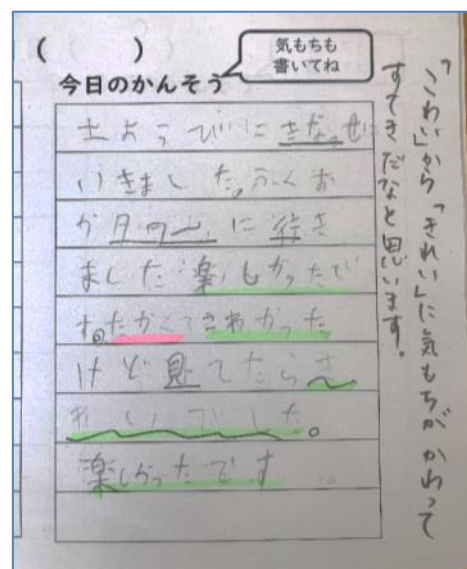
「表現」に重点をおいた学習の中で、言葉そのものの存在や、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方に着目して捉えたり、問い直したりして、言葉への自覚を高めることができたか。授業時や生活場面における行動（表現）の変容を取組のゴールとしました。



帰りの会の発表場面



学校や家庭生活における会話場面



日記の一例（小4男児）



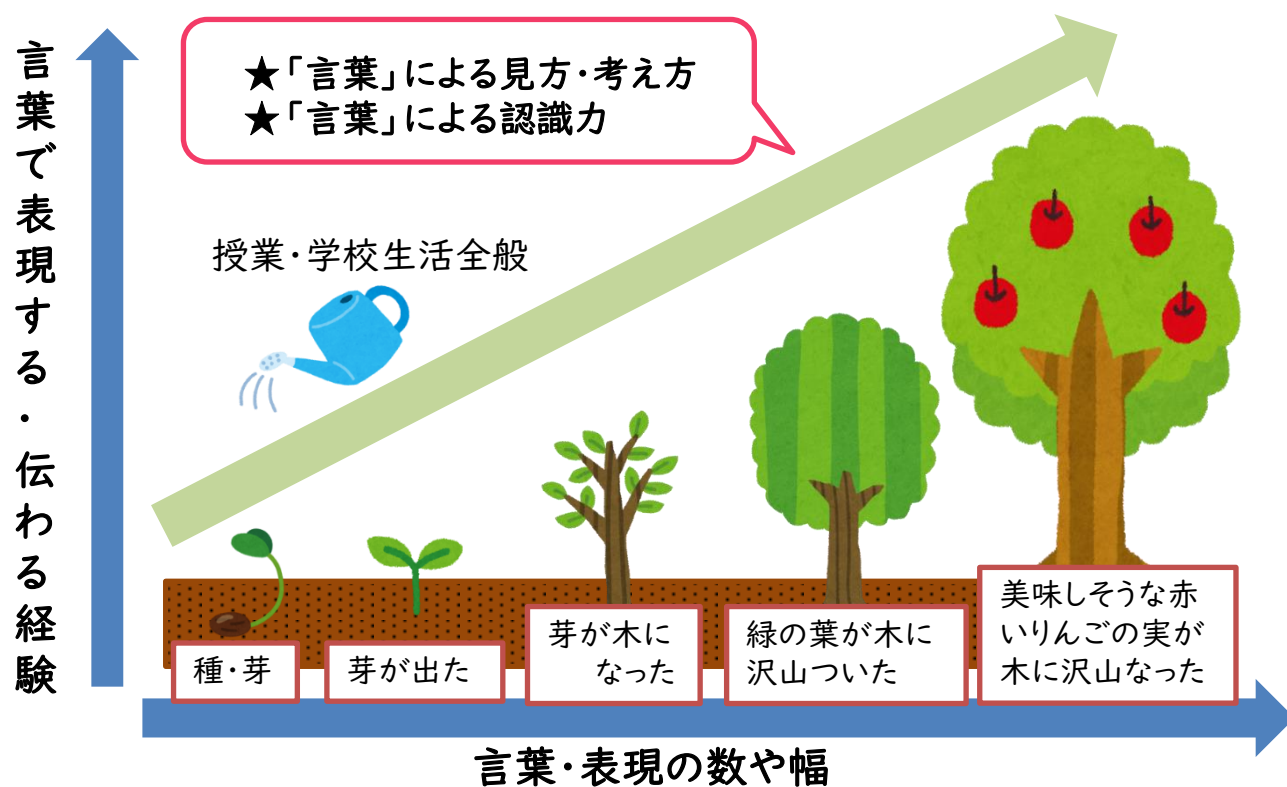
★日記の文章表現の変容

【学習前】
こわかった

【学習後】
こわかったけど
見てたらきれいでした

★学習を通して、複数の動詞や
形容詞等をつなげた文で感
想を表せるようになった。
表現の幅が以前より豊かに！

令和元年度 研究のまとめ



結果と考察（言葉の育ちについて）

「言葉の数や幅」×「言葉を使って表現すること」
＝言葉による認識力の向上、言葉による見方・考え方が豊かに！

言葉で使って表現し、伝わる喜びを得られることで言葉の認識力が高まる。
言葉の認識力の高まりが、表現の幅を広げ、見方・考え方をより豊かにする。

実践1 「いっぱい はなそう ～きょうのふりかえり～」

児童の実態（小2男子グループ）

- ◆ 小学部2段階を学習中
- ◆ 平仮名の読み書き、簡単な会話はできる
- ◆ 順序だてて話したり、質問に答えたりすることが難しい

授業づくりのポイント

- ◆ 教師と一緒に一日を振り返り、内容を整理
- ◆ 友達の話に興味を持てるように工夫
- ◆ 帰りの会で一日の振り返り発表の時間に即実践

①教師が質問しながら、順序・内容を整理



児童ならではの面白い表現は積極的に板書する

②友達の振り返りを読み、コメントをする



③振り返り内容を書く・読む



学習の評価

- ◆ 振り返りの内容を整理することで、帰りの会での発表時に伝えたいことが増え、内容も分かりやすくなった。
- ◆ 友達の話にも意識が向くようになり、友達の話の内容を尋ねると答えることができるようになりつつある。
- ◆ 保護者からの連絡帳で、家庭で学校のことを話すことが増えたとの記載が増える。

実践2 「言葉を楽しもう！」

児童の実態（小3・4年生Aグループ）

- ◆ 小学部2段階、3段階を学習中
- ◆ 言葉によるコミュニケーションができる
- ◆ 言葉の意味理解が不十分
- ◆ 発表に使う言葉や表現が乏しい

授業づくりのポイント

- ◆ お話をイメージしやすくする单元最初の「言葉調べ」
- ◆ 言葉の細かいニュアンスの違いを感じる「動作化」
- ◆ 学んだ言葉を使って、自分のことを「表現」
- ◆ 表現への意欲を高める「共有・共感」

言葉調べ



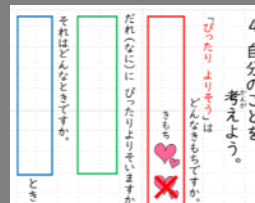
- ◆ ことば絵辞典、タブレット、具体物を使い、言葉の意味や使い方等を調べる。

動作化



- ◆ 調べた言葉を動作で表現し、言葉のもつ働きや様子を実感する。
(例) ぴったり よりそう

表現



- ◆ 題材で取り扱った言葉を、自らの生活や経験に置き換え、どのような場面で使うか理解し、文章を作って発表する。

共有



- ◆ 児童の発表内容や発言は友達と共有したり、教師がフィードバックしたりすることで相手に伝わる喜びを実感し、発表への意欲につなげる。

学習の評価

- ◆ 様々な手段で言葉を調べ、言葉を多面的に捉えることができた。
- ◆ 学習した言葉を、生活場面で使うようになった。
- ◆ 言葉を選びながら、相手に伝わる話し方を考え話すようになった。
- ◆ 保護者から「以前より会話する力が付いた」という報告があった。

研究目的

適切な時期に適切に心と体の変化の学習を行うことで、

- ①安心して思春期を迎えることができる。
- ②他者、特に異性との適切な関わりについて学びを深めることができる。

評価

性教育に関わる部分の評価をどうするか？

共同研究者より
非常にプライベートな部分を扱うところ。
性教育は学校だけではなく家庭でも大きく関わる場所。学校での変容だけでなく保護者に家庭での変容等も聞くことで、効果的な授業だったのか、という評価につながるのではないかな。

保護者との「思春期茶話会」の計画

思春期茶話会実施のポイント

- ◆ 悩みやニーズ、疑問など自由に思いを語ってもらえるよう、自由に語れる和やかな雰囲気づくり
- ◆ 保護者の思いを知り、授業内容の精選・授業づくりにいかすこと
- ◆ 授業実施後の家庭との連携・評価へとつなげること（風通しのよい連携）

研究内容

- ◆ 対象児童：小学部4～6年生男子8名（＊女子は1名のため、授業内容によっては合同）
4年生以上を対象とした理由は、個人差はあるものの身体の発育は生活年齢相当の発達が進められるので、小学校同様に4年生以上を対象としました。また、保護者のニーズや児童の実態に応じて授業内容を精選し、使用する言葉を整理しました。

時期	次	学習内容（体育 保健領域）
6月	1	すてきなおいさんになろう① ～思春期の体の変化 パート1～
9月	2	すてきなおいさんになろう② ～プライベートゾーン パート1～（男女合同）
10月	3	すてきなおいさんになろう③ ～プライベートゾーン パート2～（男女合同）
11月	4	すてきなおいさんになろう④ ～異性との距離「なかよしスペース」～（男女合同）
12月	5	すてきなおいさんになろう⑤ ～マナーについて（男女合同）
1月	6	すてきなおいさんになろう⑥ ～思春期の体の変化 パート2～

保護者との連携

- ◆ 保護者にアンケート調査
- ◆ 児童への個別の実態調査
- ◆ 思春期茶話会（夏休み前）

- ◆ 思春期茶話会（冬休み前）

＊振り返りの学習＊～前時の学習を必ず次の授業で復習～（毎時実施）

性教育の方向性について共同研究者から助言

指導に当たっては、発達の段階を踏まえること、学校全体で共通理解を図ること、保護者の理解を得ることなどに配慮することが大切である。

※中教審：「学校教育全体（教科横断的な内容）で取り組むべき課題（食育、安全教育、性教育等）と学習指導要領等の内容（H17年度）」を踏まえて

- ◆ 性教育は、生涯に関わる教育
- ◆ プライベートゾーンは性教育の基本。適切な指導が児童生徒の自己肯定感を高め、自分と他者への理解につながる基礎となる。繰り返しの学習が必要。
- ◆ 保護者が成長（性的な発達を含む）と一緒に喜び、肯定的な態度をとれるように。
- ◆ 性器いじり等の性的な問題を否定するのではなく、性衝動の発現と捉え指導していく。（周りの大人は、性器の役割として3点を理解しておくとうい）
- ◆ 児童生徒が疑問を持ったときが、最も効果的な教えどき。

知的障がい教育における性教育の授業づくりのポイント

体験的な活動



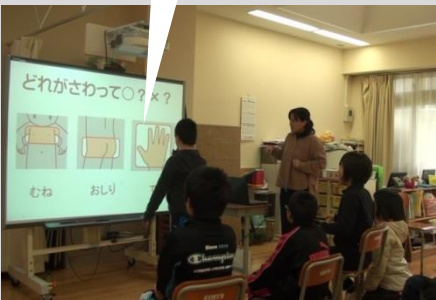
等身大パネル

「なかよしスペース」は腕一本！



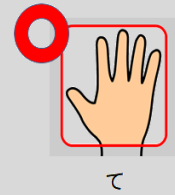
なじみやすいキーワード

タッチして正解すると“ピンポン！”と効果音とアニメーション

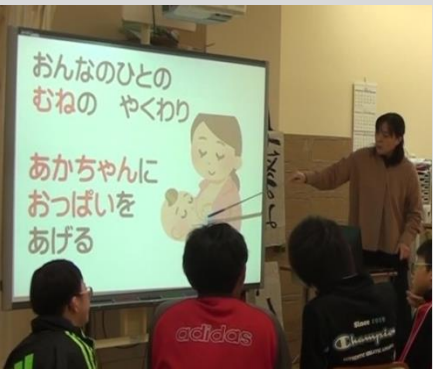


タブレット・スマートボードの活用

さわって○？×？

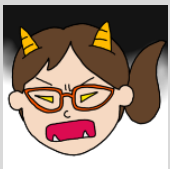


基礎・基本の習得



クイズ形式にてプライベートゾーンの約束と役割を教える

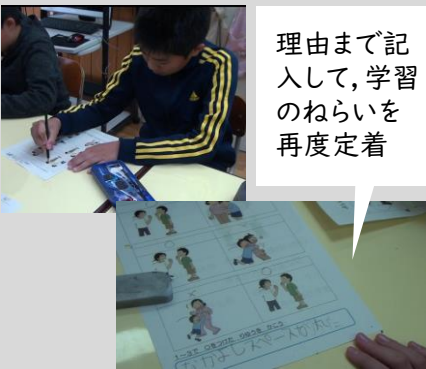
興味を引くキャラクター



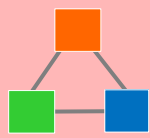
どうして、いくみ先生はおこっているのかな？



学びの共有化



ワークシートや授業内容のプリントをファイルに綴って家庭へ



中学部 “質”の高い授業づくりを目指して

中学部では、これまで知的障がい教育における教科別の指導の在り方を研究のテーマに据え、大学教員と密に連携を取り合って実践に取り組んできました。令和元年度は、過去2年間の研究成果と課題を踏まえ、授業のブラッシュアップを図るために、取組1と取組3の内容を効果的に関連付けて取り組んできました。

研究1年次 「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善

数学科 「お金の学習」



金銭に関する基礎的な知識を活用し、目的や状況に応じた支払い方を考えていきました。

授業づくりのポイント

- ◆ 思考を促す課題設定の工夫
- ◆ 基礎的な知識の定着（繰り返し学習）
- ◆ 考える形態（自分で・みんなと・自分に）

職業・家庭科 「くらし『調理にチャレンジ』」



調理に必要な材料や手順、道具等を考え、実際に調理をしながら理解へとつなげました。

授業づくりのポイント

- ◆ 実物や絵カードを操作して学ぶ
- ◆ 振り返りシートを家庭と共有化
- ◆ 学び合いのメソッド（グループ編成の工夫）

保健体育科 「ポートボールをしよう」



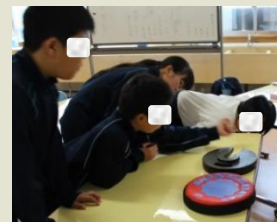
ドリブルやパス、守りなどの動きを分けて個人やチームで楽しみながら取り組みました。

授業づくりのポイント

- ◆ 必然性を仕組み、主体的な動きを引き出す
- ◆ 内面を揺さぶる（興味・達成感・悔しさ等）
- ◆ 動きへのアプローチ

研究2年次 教科の本質に迫った授業探求と特別の教科 道徳への挑戦

数学科 中学部全生徒を対象に、知的障がいのある生徒の数学の授業について研究し、その中で、数学の見方・考え方を捉えた授業づくりに取り組みました。



「測定」

帰納的
演繹的
類推的
数学的な見方・考え方

授業づくりのポイント

- ◆ リフレクション（省察・内省）の必要性
- ◆ 問題発見と解決の過程及び般化

特別の教科 道徳

特別の教科 道徳を対象に、各教科等や行事と関連させた題材の検討を行い実践しました。



「マラソン大会」

授業づくりのポイント

- ◆ 代弁的・翻訳的支援
- ◆ 行事や学校生活等と関連付けた題材の設定
- ◆ ミニホワイトボードを活用した意見交換

研究3年次 授業づくりシステムの改善～“質”の高い授業を目指して～

研究最終年となる今年度は、“質”の高い授業を目指し、年間における授業づくりのシステムを強化してきました。これまでの熊大式授業づくりシステムによるチームアプローチでの授業づくりを基盤とし、授業の評価・改善までを含めた熊大式マネジメントシステムを発展的に進めていくことで、授業のブラッシュアップにつながると考えました。取組1と取組3の内容と関連付けながら、職員間の情報共有化を効果的に進める「ツールの活用」と、授業評価・改善が効率的に進める「時間づくり」に焦点を当て、“質”の高い授業づくりにつなげていきました。

ツール

人と人との間に有効なツールを用いることで、話し合いの活性化が生まれます。ちょっとした工夫で話し合う環境づくりを。



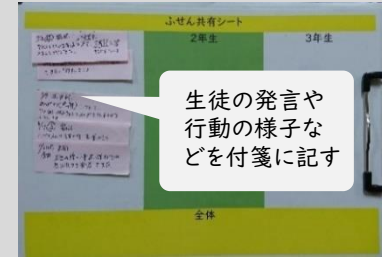
時間

日々の授業評価の積み重ねが、授業改善に最大の効果を発揮します。ちょっとした工夫で時間を有効活用。

ツールの活用

◆ 付箋を活用した生徒の様子の情報共有

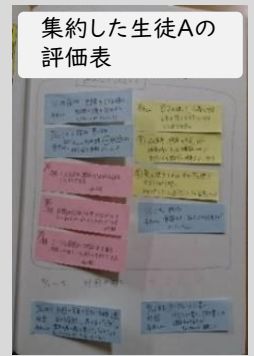
授業における生徒の様子や発言など、教師が普段の気付きを担任の枠を超えて付箋に書き留めていきました。単元終了後は付箋を交換し合いながら生徒の学びの状況を話し合う機会になりました。また、付箋は各担任が保管する生徒個々の「指導内容関連表」のファイルにまとめ、学期末の個別の指導計画や通知表の記入等に活用しました。



生徒の発言や行動の様子などを付箋に記す
教師1人1シートを所有。普段の学校の生活場面でも使用。



単元終了後はシートを持ち寄って、付箋紙の交換。



集約した生徒Aの評価表

生徒一人ひとりの単元の学習状況の様子を多面的な視点で集約することができました。また、個別の指導計画の評価にも即時につなげることができました。

◆ Lシートの活用

Lシートを活用し、学校行事や主となる学習を軸として各教科等の単元を配列しました。それにより、国語や数学、道徳などでは、学校行事や生徒の日常生活等との関連性を図ることができ、また、地域資源の活用や協働の視点も含めた効果的な授業づくりにつなげることができました。

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
教科名	国語	数学	社会	理科	英語	音楽	美術	体育	保健	家庭	職業	道徳
単元	国語	数学	社会	理科	英語	音楽	美術	体育	保健	家庭	職業	道徳
単元	国語	数学	社会	理科	英語	音楽	美術	体育	保健	家庭	職業	道徳

中学部Lシート（一部抜粋）
国語や数学で学校行事等と関連付けて取り扱った時期。



数学では、ラグビーワールドカップの時期に優勝国の予想をしました。



Lシートを、ミーティングルームに掲示したままにし、1年間の学習の流れや教科間の関連付けを日頃から意識できるようにしました。

時間づくり

◆ S・M研の効率的な実施

日	時	内容	担当者
1	10:00	外国語	英語部
2	10:00	理科	理科部
3	10:00	社会	社会部
4	10:00	英語	英語部
5	10:00	音楽	音楽部
6	10:00	美術	美術部
7	10:00	体育	体育部
8	10:00	保健	保健部
9	10:00	家庭	家庭部
10	10:00	職業	職業部
11	10:00	道徳	道徳部
12	10:00	道徳	道徳部

S・M研予定表（一部抜粋）



毎日15分間のS研

研究部がS・M研を柔軟に運営できるように月間のスケジュールを計画し、何を評価するのかを毎日確認していきました。毎回のS研で授業を評価し・改善につなげ、M研での単元の評価につなげることができました。

◆ 時間の意識化



ミーティングにはタイムマネジメントが重要です。司会だけでなく全員が時間を意識できるよう、部屋の両壁には時計を設置し、設定された時間内に終わるように意識付けを図ることができました。それによって生み出した時間を教材研究にあてることができました。

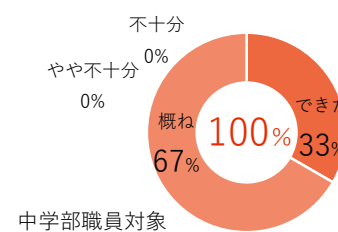
◆ 評価記録



会議部屋の評価ファイル

いつでも授業評価が確認・共有できるように、あえて電子化で残さず手書きで記録した3年間のファリングが授業改善につながりました。

成果と課題



授業づくりのシステムを改善していくことで、日々の授業評価から授業改善に効果的・効率的につなげていくことができました。また、授業づくりの時間を生み出そうとして、ミーティングの回数を減らすのではなく、「ツールの活用」と「時間づくり」を工夫することで、より効果的なミーティングになり、結果として“質”の高い授業につながっていったのではないかと考えます。一方で、単元の目標設定や学習状況の評価には十分な検討ができていないという課題が残りました。今後は、築き上げたシステムの発展と深化を図りつつ、課題解決に努めていきます。

数学科 知的障がい教育における「数学」の授業づくり

数学 吉村 昇 准教授
特別支援教育 菊池 哲平 准教授

道徳 「特別の教科 道徳」における授業内容設定の考え方と代弁的・翻訳的な（補助的・自己）支援の在り方

道徳教育 今井 伸和 准教授
発達心理学, 教育心理学 高崎 文子 准教授
特別支援教育 本吉 大介 准教授

実践1 ラグビーワールドカップ大胆予想〈データの活用〉

生徒の実態（クローバーグループ）

- ◆ 中学部1段階, 2段階を学習中
- ◆ 自分の気持ちや考えを互いに伝え合える
- ◆ これまでデータの活用の基礎的な学習をしている

授業づくりのポイント

- ◆ 正しく「定義」を捉える
- ◆ 互いに伝え合い, 学びを深める「自分で」→「みんなで」→「自分に」
- ◆ 学んだ事の有用性を感じ, 学習や日常生活の中での活用へつなげる

① リーグ戦の結果をまとめる

② 決勝トーナメントの勝敗を予想

③ 根拠を基に勝敗予想を伝え合う

学習の評価

- ◆ リーグ戦の結果を基に表に整理してまとめることで, 勝ち数や負け数, 得点や失点などを意識することができた。
- ◆ リーグ戦の結果から, それぞれが明確な根拠を持って決勝リーグでの勝敗を予想することができた。
- ◆ それぞれの生徒が自信を持って, 自分の着目した点から予想を伝えることができた。
- ◆ ワールドカップにはさほど関心がなかった生徒も, 自分たちの予想をもとにワールドカップを観戦し, 予想と比較しながら楽しんでワールドカップを観戦することができた。

実践2 まとまりと端数で考える〈数と計算〉

生徒の実態（スピードグループ 生徒A）

- ◆ 小学部3段階, 中学部1段階を学習中
- ◆ 100までの数詞や数字で表すことはできるが, 101以降は曖昧
- ◆ 2や5, 10のまとまりで数えることが難しい
- ◆ 3位数は十の位に0が入ると読んだり書き表したりすることが難しい(例: 105, 208など)

授業づくりのポイント

- ◆ 目標によって授業中の課題を分け, 個人差に対応
- ◆ 数唱, 時刻読み, 時間感覚などをミニコーナーとして設定し毎時学習
- ◆ 基礎事項を学習し, 既習事項を活用できるような授業展開に

早く, 簡単に, 正確に数える (2位数, 3位数)

- ◆ 10のまとまりを作り, 「まとまり」と「端数」に分けて数える
- ◆ 数えた結果を数字で書く

十進位取り記数法の基礎

- ◆ 数字カードを使って, 具体物の数を表す (具体物が10や100のまとまりになっている)
- ◆ 「0は読まない」など読み方のルールを知る

百玉そろばん

- ◆ 教師が言った数だけ玉を移動させる
- ◆ 教師が移動させた玉の数を言う

数直線 (宿題)

- ◆ 1とび, 2とび, 5とび, 10とびの数直線の問題
- ◆ 「0とび」という考え方を教える

学習の評価

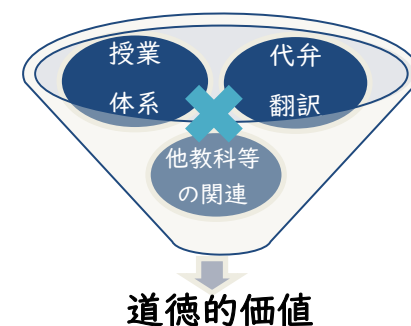
- ◆ まとまりと端数を作って数えるようになり, たくさんのもを数える時の間違いがなくなった。
- ◆ 「0は読まない」というルールを自分で唱えてから, 数字を読むようになった。3位数が読めるようになった。
- ◆ 50円を複数使った買い物ができるようになった。
- ◆ 既習事項を活用し, 測定の授業では, 長さの目盛りが5とび, 10とびであることに気付いた。

はじめに 多面的・多角的に“自分ごと”として考える

中学部の自立活動では, 主に「人間関係の形成」や「コミュニケーション」について, 他者の視点や気持ちになって考えたり, 自分を振り返ったりするなど, 道徳的価値を育む取組を積み重ねてきている。

既存の「道徳」の教科書や動画はあるが, 知的障がいのある生徒が様々な知識をつなげて考えたり, 比較したりすることは難しいと考える。

他教科等での経験を道徳と関連づけることで, 自分のこととして捉えやすくなるのではないかと。また, 教師が代弁的あるいは翻訳的な役割をすることで, 表出が難しい生徒の気持ちや考えを伝える一助になるのではないかと。



研究の流れ 授業形態

第1次 H29年 年4時間	◆ 授業形態は一斉授業 ◆ NHK for school内のデジタルコンテンツ(道徳)の活用
第2次 H30年 年7時間	◆ 一斉授業(話し合い活動はクラス毎) ◆ 行事・生活単元学習と学習指導要領の道徳の項目を関連させたテーマ設定
第3次 本年度 年15時間	◆ テーマの内容に応じたグループ別学習の導入 ◆ テーマに添ったアイスブレイクの導入

他教科等と道徳の項目を関連させた授業設定と授業形態

行事

生活単元学習

各教科

テーマ設定

- ・動作を含めた体験的な学習から
- ・記憶に新しい, 各教科等での経験から
- ・相手を意識したかわりが多い内容から

A主として
自分自身に関すること
自己理解

B主として
人との関わりに関すること
他者相互理解

C主として
集団や社会との関わりに関すること
伝統・文化の尊重
公正・公平な態度

D主として
生命や自然・崇高なものとの関わりに関すること
生命の尊さ
自然愛護

一斉授業・グループ別授業

- ・共通の経験の中で, 振り返り時の活動や体験, 動作などの共有
- ・意見交換での気持ちなどを共感

授業について 授業の流れ, 代弁的・翻訳的支援

挨拶, 学習内容(道徳項目)の確認

アイスブレイクゲーム

テーマ発表(VTRや写真の視聴)

意見交換(代弁・翻訳的支援)

まとめ(発表, 意見等の共有)

代弁的・翻訳的支援

- ◆ 気持ちの代弁
- ◆ 感情表出を誘うきっかけ作り (気持ちを表す語彙, リフレーミング)
- ◆ 自分自身を客観視できる問いかけ など
- ◆ 文字の代筆
- ◆ ミニホワイトボードを活用した意見の整理 など

話し合い活動における実態に応じた個別支援

代弁的・翻訳的支援

これまで培ってきた自立活動におけるコミュニケーションの学習のノウハウと, 心理劇の手法を応用し, 生徒の内面の気持ちを教師が代弁したり, 考えを整理して翻訳的な役割をしたりしている。

授業実践

題材「マラソン大会を振り返ろう ～自分の“ライバル”とはどうだった?～」

授業づくりのポイント

- ◆ 気持ちスイッチカードを活用し, 気持ちの葛藤を指し示せるようにした。
- ◆ 周回数記録カードを活用(保健体育との連携)し, 目標や周回数の変化, 感想を振り返られるようにした。

話し合い活動～発表

教師	◆ 時系列に添った振り返り ◆ 気持ちを表す語彙の提示
Aくん	自分は最後まで〇〇くん抜かれずに頑張りました。

発表

Bさん	目標が越えられずに悔しかったです。
Aくん	Bさんの話を聞いて, 僕も走っているときの悔しい気持ちが分かりました。

評価

互いの存在を認め尊重し合う意見交換をきっかけに, 自分の変容について確認することができた。





高等部

カリキュラム・マネジメントを活用した 高等部における効果的な授業づくり

～L・M・S計画&評価サイクルのより効果的なプロセスを求めて～



研究の概要

L・M・Sシート活用

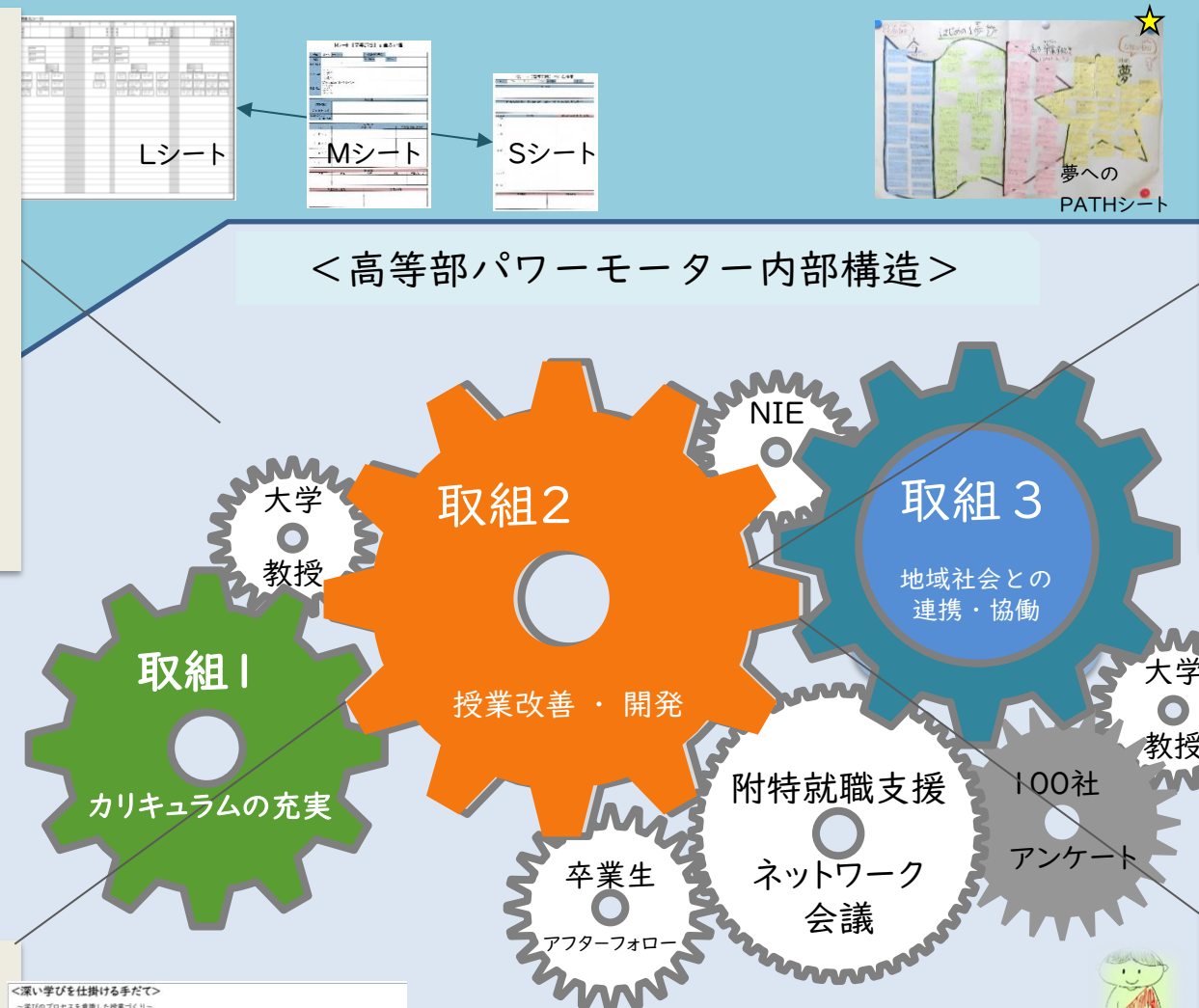
取組1 × 取組2 × 取組3

年間単元配列表（Lシート）を作成し、年間レベルの指導計画を定期的なスパンで評価することで、各教科等との関連・指導時期・指導内容、配列、年間指導計画を見直し、より効率的に授業の内容を充実させてきました。また、高等部で育成を目指す資質・能力を、各教科等の指導でどのように高めることができているのかを検証してきました。各段階での評価について、学部職員全員で年間レベルの視点を持ち共有しながら検討していくこのプロセスに、有効性と効率性を見出すことができました。



家庭科 取組2 × 取組1

生徒が「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「いつ学ぶのか」の4つの視点で家庭科の学習内容を整理し、3年間をととした年間指導計画を作成しました。今年度はその計画の中で、生徒の実態に応じた授業づくりを行い、一人一人の主体的・対話的で深い学びについて、よりよい授業づくりの検証に取り組みました。年間指導計画に沿った学習により、前年度の成果と課題、教材等を活用しながら効率的に授業づくりを進めることができました。さらに家庭や放課後等デイサービスとの連携した取組により、家庭生活等で生きる力を育むことができました。



研究初年度、高等部研究では、卒業後の生徒の姿から、課題となっているライフキャリアについて焦点を当て、「体育科」「音楽科」「家庭科」の3教科の授業の充実に取り組んできました。昨年度は、高等部での育成を目指す資質・能力について構造図として可視化し、ライフキャリアに直結する「家庭科」に教科を絞り、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「いつ学ぶのか」の4つの視点で整理を行い、授業実践に取り組んできました。また、カリキュラム・マネジメントのツールとなるL・M・Sシートを活用した各教科等の指導における効果的な授業づくりのプロセスを確立してきました。

本年度は3カ年計画のまとめということで、取組1の「カリキュラムの充実」、取組2の「授業改善・開発」、取組3の「地域社会との連携・協働」の3つの取組を有機的に関連させて、下記の4つの課題を設定し、カリキュラム・マネジメントに取り組んできました。各取組が単独な取組に終わることなく、一つ一つが大切な歯車となり、縦のつながり、横のつながりとして相互に絡み合い、大きな原動力につながっていくことがこの研究を通して整理することができました。

職業科 取組2 × 取組3

附 特就職支援ネットワーク会議やフォローアップミーティングの状況をもとに、生徒自身が卒業後の夢や生活を具体的に想像し、「働きたい」という気持ちを育むために、年間をととしたライフキャリアに立った授業実践に取り組んできました。また、附特就職支援ネットワーク会議委員の方と協働した授業づくりに取り組んできました。取組をととして、生徒の夢から学習をスタートしたことで、自分の将来の姿をイメージし、今の自分について見つめ直し、より具体的な自分の目標を考えることができるようになりました。



自立活動 取組2 × 取組3

知的障がいのある生徒が社会へ出るにあたり、コミュニケーション面を大きな課題として捉え、自立活動を組み立ててきました。今年度は、これまでの取組に加え、生徒の確かな実態把握を基にした課題設定を行い、自立活動の実践に取り組んできました。的確な生徒の実態把握をもとにした課題設定を行うため、「自立活動アセスメントシート」を開発し、個の課題に目を向けた自立活動として「チャレンジタイム」を設定しました。取組を通して、集団の中で、自分の意見が言えるようになったり、課題を生徒自身が意識して取り組むことができるようになったりしました。楽しみながら活動する中で、自分の課題を知り、チャレンジすることができるようになりました。

大区分	小区分	項目内容	実施の回数	実施の人数	実施の割合
自立活動アセスメントシート	自立活動アセスメントシート	1. 自立活動の理解が深まる	1	246	100%
		2. 自立活動の計画が立てられる	1	246	100%
		3. 自立活動の実践ができる	1	246	100%
		4. 自立活動の振り返りができる	1	246	100%
		5. 自立活動の成果がわかる	1	246	100%
		6. 自立活動の課題がわかる	1	246	100%
		7. 自立活動の改善が図れる	1	246	100%
		8. 自立活動の継続ができる	1	246	100%
		9. 自立活動の共有ができる	1	246	100%
		10. 自立活動の発表ができる	1	246	100%



L・M・Sシートを活用したカリキュラム・マネジメント ～計画・評価のPDCAサイクルをもとにしたチームアプローチ～

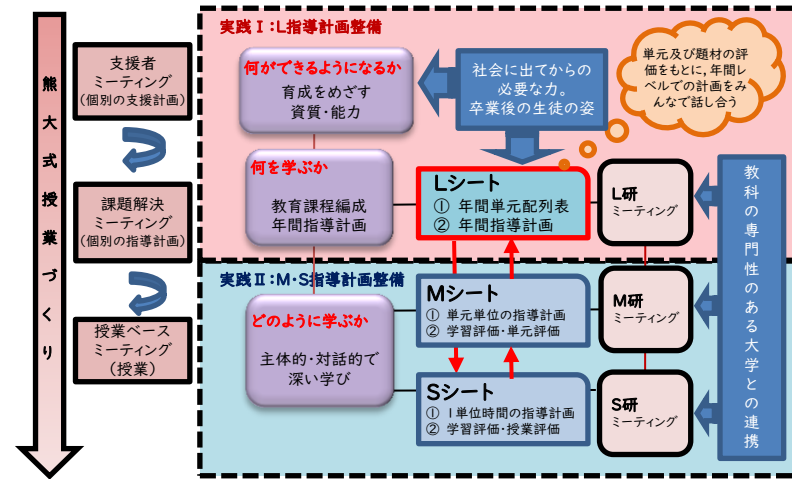
高等部全職員12人

はじめに

昨年度まで、M・Sシートを活用し、チームアプローチによる単元・題材レベルの各段階での授業計画の作成及び授業評価・改善に取り組んできました。本年度は、年間指導計画レベル(L)での評価及び振り返りのプロセスを明確にして、年間・単元・授業レベルの各段階での授業計画を作成しました。各段階での授業評価・改善を、年間指導計画及び教育課程の改善につなげていくことで、計画的かつ効率的な授業づくりのプロセスを確立することを目指してきました。

方法

- (1) 年間単元配列表(Lシート)を作成し、各教科等との関連・指導時期・指導内容、配列等の視点を基に年間指導計画を学部全職員で検討する。
- (2) 8月・12月・2月の3回、各教科等の指導におけるM・Sシートの評価を持ち寄り、年間単元配列表(Lシート)に書き込みながら、学部全職員で年間レベルでの評価・改善(L研)を行う。
- (3) 年間単元配列表(Lシート)の評価の際に、各教科等の学習で身に付いた「高等部の育成を目指す資質・能力」について確認をする。
- (4) 12月のL研の評価をもとに、次年度の年間指導計画及び教育課程について検討する。



実践

高等部Lシートの特徴

- ◆ 高等部教育の中核となる教科「**家庭・職業**」を軸として配列
- ◆ **付箋**による可動式
- ◆ 評価・気付き欄を設け、適宜記入

活用方法

- ◆ 学部の**教師全員**で、各教科及び年間単元を**考える機会**
- ◆ M・Sの評価をLに返すサイクルを年3回実施

時	平成31年3月末	令和元年7月末	令和元年12月末
L研内容	L研「年間単元配列表作成」 	L研「4月～7月の振り返り」 	L研「9月～12月の振り返り」
材料	①Lシート ②教育課程年間評価シート ③各教科の年間指導計画案	①Lシート(評価欄の追加) ②各教科の年間指導計画の冊子 ③各教科のM・Sシート(評価)→各教科担当者 ④高等部の目指す資質・能力	①Lシート ②各教科のM・Sシート(評価) ③個別の指導計画評価(同時期) ④各教科等関連表(同時期) ⑤高等部の目指す資質・能力
方法	①各教科等の単元の題材名及び学習内容を簡潔に付箋に書く ②1教科ずつ、付箋を貼りながら学習のねらいを説明する ③横軸の時系列の視点で見る ④縦軸の教科等横断的な視点で見る ⑤全体を俯瞰的に見る	①1教科ずつ、M・Sの評価を基に、L(年間の視点)で振り返る ②各教科の学習で高めた「高等部の資質・能力」について考える ③年間の指導計画及び単元配列(教育課程)を俯瞰的に見る	①個別の評価と関連表のチェック ②1教科ずつ、M・Sの評価を基に、L(年間の視点)で振り返る ③各教科の学習で高めた「高等部の資質・能力」について考える ④来年度の教育課程を視野に入れ、内容・時数・時期を振り返る

まとめ

学部の全職員が年間レベルの視点を持ち、年間単元配列表(Lシート)を活用し、年3回の評価を行うことで、各教科等との関連・指導時期・指導内容、配列、年間指導計画を見直し、より効率的に授業の質を向上させることができました。また、高等部の育成を目指す資質・能力を、各教科でどのように高めることができているのかを明らかにすることができました。

家庭科 家庭科における熊大式マネジメントシステムの構築 ～生徒の姿を踏まえた授業及び単元の評価を基にした年間指導計画の改善～

家庭
八幡彩子
教授(本校校長)

はじめに

家庭科における「3年間を見通した年間指導計画」に基づいた授業および単元のPDCAサイクルを年間指導計画の改善に生かすことのできる熊大式マネジメントシステムを運用し、一人一人の学び・育ちを確かなにつなぐ授業の充実を図りました。

方法

- ◆ 「3年間を見通した年間指導計画」に基づいた授業づくりシステムの運用と、S研→M研→L研による年間指導計画の改善
- ◆ 学校での学び・育ちを家庭・放課後等デイサービス(以下放デイ)に確かなにつなぐ連携の在り方の検討

実践



はじめに

卒業後の生活を見据えて

今年度、高等部では「職業科で育成を目指す資質・能力」を検討しました。その結果と、取組3におけるフォローアップミーティング及び一般企業100社による「在学中に身に付けてほしい力」アンケートの結果を踏まえ、本校高等部の職業科「進路の学習」において、卒業後の生活に関わる教育・労働・福祉関係者による附特就職支援ネットワーク会議委員（以下、附特NW委員）と協働し、ライフキャリアの視点に立った授業実践を行うことで、生徒の「働きたい」という意欲や、「なぜ働くのか」といった働く目的や職業観をより一層育むことができるのではないかと考えました。

目的

卒業後の夢や生活を具体的にイメージしながら、「働きたい」という気持ちを育むための授業実践を行う。

方法

- ◆ 卒業後の生活について、専門家である労働・福祉関係者によるアドバイスを取り入れた授業計画
- ◆ フォローアップミーティングや「在学中に身に付けてほしい力」アンケートを参考にした授業内容の検討
- ◆ 生徒自身が目標を設定し、主体的に課題解決できるための年間を通したライフキャリアの視点に立った授業実践

実践

職業科を中心とした年間指導計画（高等部2年）

【5・6月期】 職場見学・体験	★【9月期】 コラボ授業①	【9・10月期】 現場実習	【11～1月期】 学校生活全般	★【2月期】 コラボ授業②
◆ 職場見学 →先輩から学ぶ ◆ 職場体験 →友達と一緒に →働く経験を積む	(1)PATH(将来の夢) (2)『わくわくライフ』 を考えよう ①個別ワーク ②シェアリング・交換 ③まとめ・再考する	(1)目標決め (2)現場実習 →日々の振り返り (3)まとめ →今後の目標設定 (4)発表(報告会)	実習後に設定した目標 の達成状況の確認(評価) ※生徒自身の自己評価 と教師や保護者による 他者評価を行う	働くだけではなく、家庭 生活や楽しみ(余暇)の 視点を持って、生徒版 PATHや『わくわくライフ』 をもとに、より具体的 な目標や方法を考える

協働した授業づくり

自分のこと、生活や内面を見つめることができるようになるというですね！

授業計画の様子

【わくわくライフシート】

コラボ授業①（9月期）の取組

生徒たちが語った『卒業後の夢』

“夢を語る”ことから始まるPATHの手法を用いて、生徒自身が『卒業後の夢』『はじめの一步』などについて、想いを付箋に記入し、クラス全員で共有

※生徒の実態に応じて手法をアレンジして実施

附特NW委員と共に授業をすすめる
 ＊アストライ代表:山田浩三氏

授業づくりのポイント

- ◆ “夢”からスタートすることで、卒業後の生活に対して、プラスなイメージから考えを広げる
- ◆ 個で考える時間を十分確保する
- ◆ 友達の考え・想いを知ることで、自分の考えをより深める
→シェアリングの時間を設定する

【シェアリング】 【コメント交換】

授業づくり(評価)

～附特NW委員との授業研究会～

【授業研究会でのアドバイスなど】

- ◆ 友達のよいところに気付く力がある
- ◆ 友達からコメント(評価)をもらうことで、肯定される喜びを感じ、自分への気付きにつながる
- ◆ 夢や希望は、様々な経験や情報が増えていくことで変化する

成果と課題

コラボ授業①(9月期)を終えて

- 自分の将来の姿をイメージすることができた
- 具体的な目標を考えることができた → 現場実習への意欲が高まった
- ▲ 自分の生活(家庭)とのすり合わせが十分でないものもあった

コラボ授業②(2月期)に向けて

- ◆ 生徒版PATH及び『わくわくライフ』を再考
- ◆ より具体的な実践場面を想定した目標設定(家庭と連携)
- ◆ 他教科等と関連付けた学習 例:家庭科(余暇の学習)

はじめに

「できる」「わかる」を胸に、社会へ

これまで、本校高等部の自立活動はコミュニケーションに特化して行われてきました。知的障がいのある生徒が社会へ出るにあたり、コミュニケーションは大きな課題となることが多くあります。しかし、個の課題に目を向けると、手先の作業面や、自己理解、ストレスマネジメント等、他にも取り組むべき課題がありました。「自分の△△が分かった」等の経験を積み、社会へとばたいてほしいと思い、自立活動の充実を図ることにしました。

方法

的確な実態把握をもとにした課題設定

「在学中に身に付けてほしい力アンケート結果」「高等部の教育課程」「自立活動の27項目」を基に、本校独自の「自立活動アセスメントシート」を開発し、的確な実態把握と、グルーピングを行い、授業に取り組みました。以下は各グループの授業モデルです。

Model I | 作業能力と体調管理

目指す姿

手指の巧緻性を高めるとともに、作業の効率化を自分なりに考えて取り組むことができる

活動内容

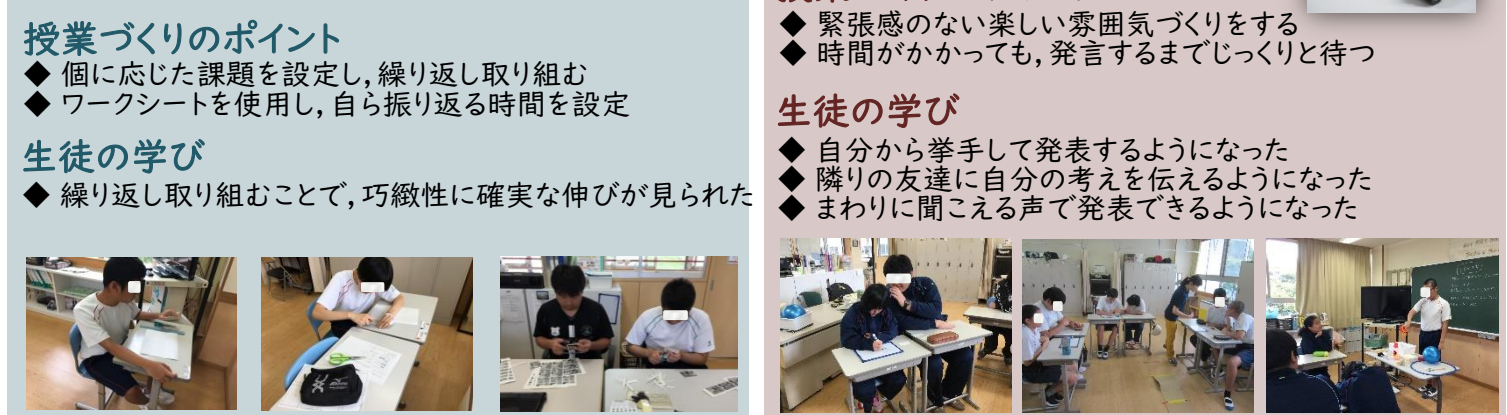
①手先を使った課題に取り組む
 ②ワークシートで課題により良くする、速くするにはどんな工夫ができるかを考える
 ③再度やってみる
 ④振り返る

授業づくりのポイント

- ◆ 個に応じた課題を設定し、繰り返し取り組む
- ◆ ワークシートを使用し、自ら振り返る時間を設定

生徒の学び

- ◆ 繰り返し取り組むことで、巧緻性に確実な伸びが見られた



Keyword 作業効率・体調の相談

Model III | 自分を知る

目指す姿

自分のことを理解し、相手に自分のことを伝えることができる

活動内容

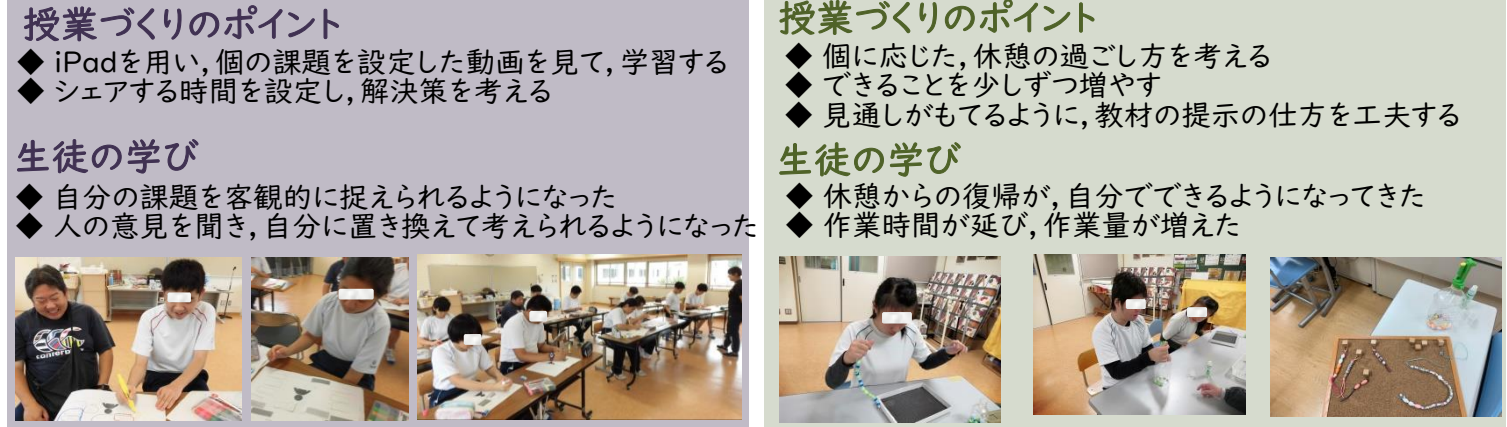
①自分の好きなこと、得意なことを整理
 ②自分の嫌いなこと、苦手なことを整理
 ③現場実習や班別作業等での課題の整理
 ④トリセツをつくる

授業づくりのポイント

- ◆ iPadを用い、個の課題を設定した動画を見て、学習する
- ◆ シェアする時間を設定し、解決策を考える

生徒の学び

- ◆ 自分の課題を客観的に捉えられるようになった
- ◆ 人の意見を聞き、自分に置き換えて考えられるようになった



Keyword 自己理解・特性理解・トリセツ

Model II | 集団の中のコミュニケーション

目指す姿

自分の声の大きさを知る
自分の思いや考えを言葉に出すことができる

活動内容

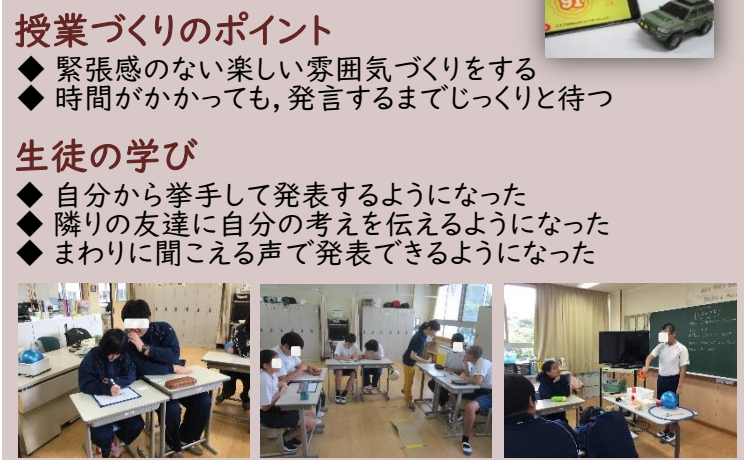
①自己紹介をする
 ②大きな声を出してマビーを動かそう
 ③2人で協カクイズ大会
 ④「言ってはいけない」

授業づくりのポイント

- ◆ 緊張感のない楽しい雰囲気づくりをする
- ◆ 時間がかかっても、発言するまでじっくりと待つ

生徒の学び

- ◆ 自分から挙手して発表するようになった
- ◆ 隣の友達に自分の考えを伝えるようになった
- ◆ まわりに聞こえる声で発表できるようになった



Keyword 自己発信力・伝わる喜び

Model IV | 作業と休憩の切り替え

目指す姿

決められた場所で作業と休憩を繰り返す
もう少し頑張るとできそうな課題にチャレンジする

活動内容

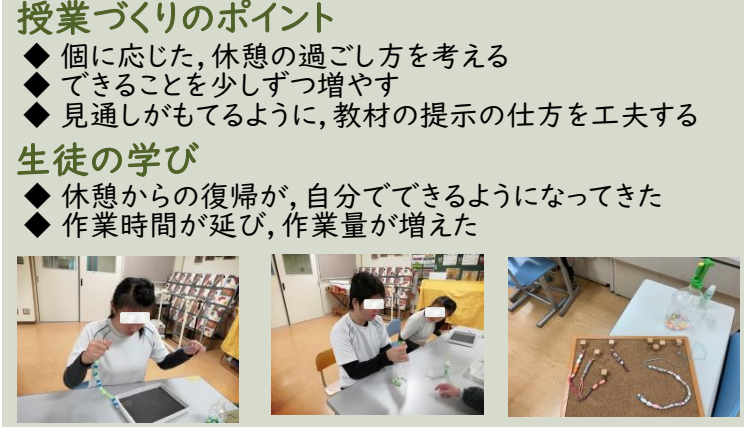
①活動(ペーパービーズ)
 ②休憩
 ③タイマー(2分)／声かけ(5分)
 ④活動

授業づくりのポイント

- ◆ 個に応じた、休憩の過ごし方を考える
- ◆ できることを少しずつ増やす
- ◆ 見通しがもてるように、教材の提示の仕方を工夫する

生徒の学び

- ◆ 休憩からの復帰が、自分でできるようになってきた
- ◆ 作業時間が延び、作業量が増えた

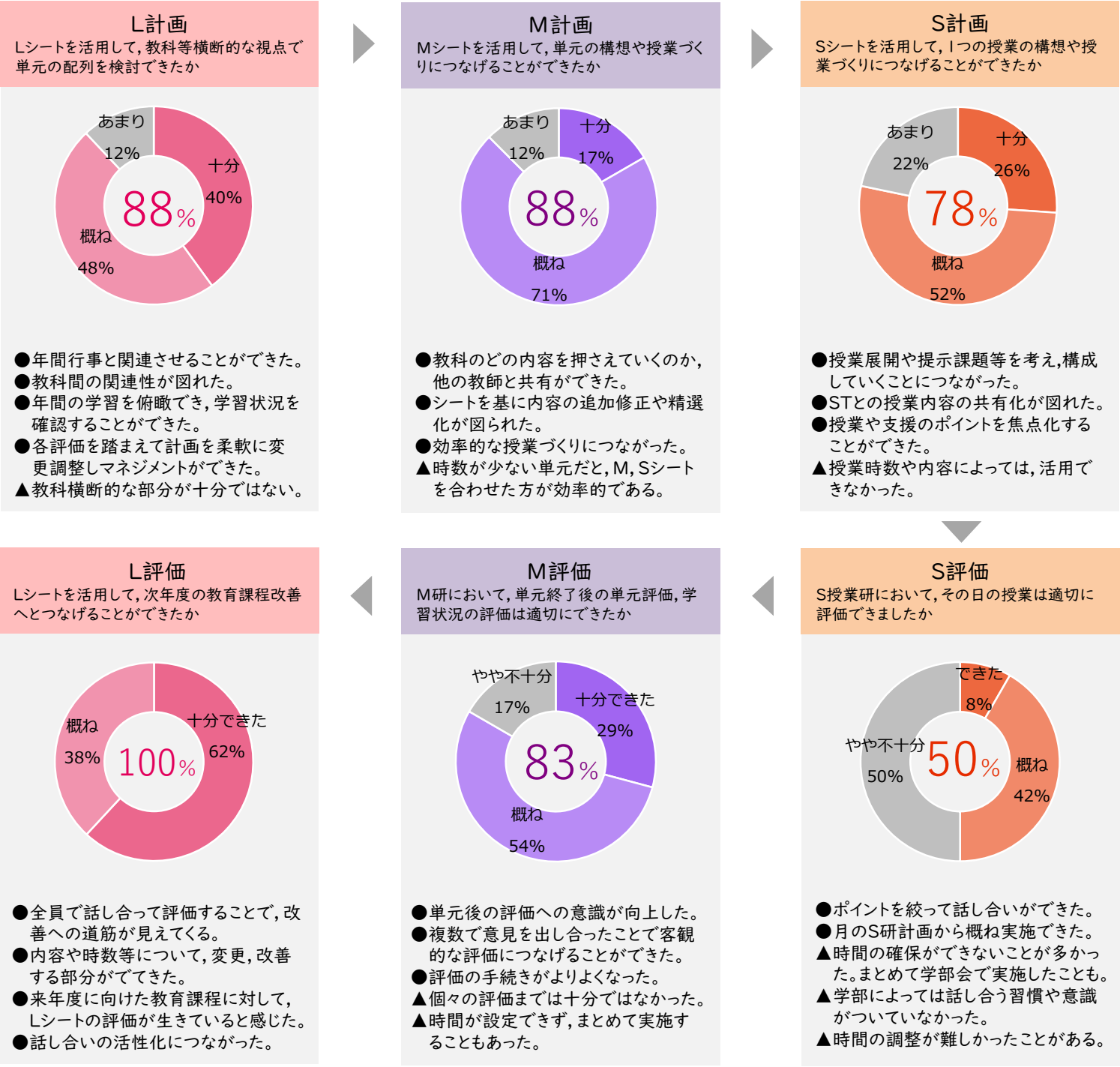


Keyword 切り替え・集中力の持続

本研究の成果と課題

熊大式マネジメントシステムの分析

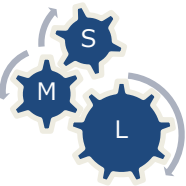
熊大式マネジメントシステムの歯車であるL・M・S段階におけるPDCAサイクルが有効であったか、職員アンケートを基に分析しました。



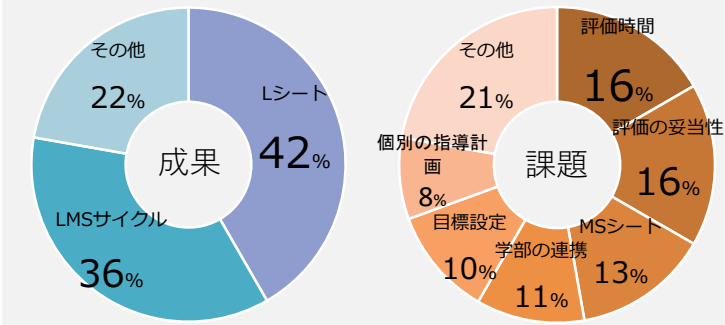
熊大式マネジメント・システムの成果と課題

年間を見通して単元を配列するLシートを活用したことにより、「いつ」「何を」教えるのが明確になり、M・Sシートにおいては「どのように学ぶか」の視点を持って効果的・効率的な授業づくりへとつなげることができました。また、アンケート評価からも、L・M・Sの各段階における話し合いが活性化されたと考えられます。一方で、S授業研のシステムに課題が残りました。S授業研の効果では**92%**が「効果がある」と回答を得ていますが、運営面において、日々の業務に追われることに

よるS研を実施する意識の低下が見られました。調整するキーパーソンと、学校全体のタイム・マネジメントが今後の課題であると裏付けされます。この3年間の実践により、全職員の教育課程への意識が高まり、教育課程を中心に据えながらカリキュラムについて検討・改善を行う基礎が構築されたと考えます。今後はシステムを潤滑化させる「**時間**」と「**調整**」を重視し、持続可能となるようマネジメントシステムの発展・進化を目指していきたいと考えます。

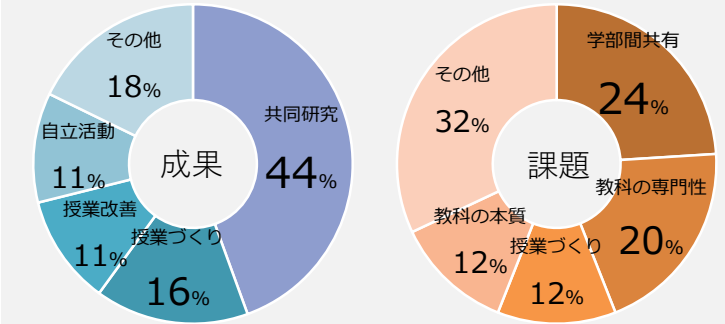


研究全体の分析



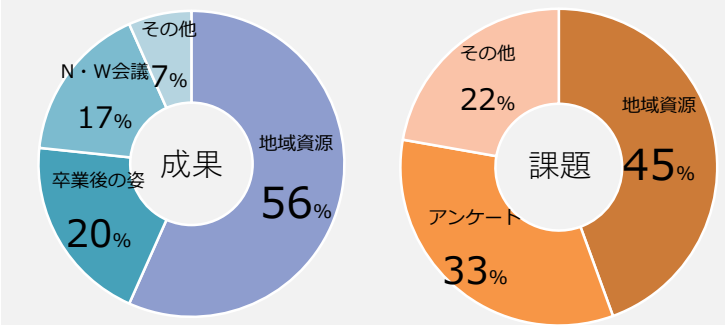
取組1 カリキュラムの充実

Lシートを起点とし、教科等横断的な視点を持って、単元の配列ができたことにより、各単元や各授業の効果的な運用につながったと考えられます。また、LMS段階での歯車が機能したことにより、教育課程の評価・改善につなげることができました。一方で、各学部ともに目標設定や評価の時間の確保等に課題が残りました。持続可能なマネジメントシステムの確立において、タイムマネジメントも含めた運用の見直しが必要であると考えられます。



取組2 授業改善・開発

熊本大学教員との3年間にわたる共同研究の取組により、授業改善や評価の在り方など、様々な視点で授業づくりの質を高めることができました。また、道徳や自立活動、教科別の指導など、新たな実践に取り組み、それぞれの本質を追求することができました。一方で、各学部の取組や情報の共有化、教科の専門性等に関して課題が残りました。今年度から立ち上がった学部連携班を軸に、今後は学部間のつながりや、12年間の系統性ある学習内容を検討・整理していきます。



取組3 地域社会との連携・協働

児童生徒の学びの深まりとともに、教師の地域資源活用意識が高まり、効果的な授業づくりにつなげることができました。また、一般企業からのアンケートにより、高等部の教育内容の改善や、ネットワーク委員との協働した授業づくりにも着手でき、社会に開かれた教育課程へと踏み出すことができました。今後も、一方的に資源を活用するのではなく、協働の意識を持ったwin-winの関係づくりに努め、各アンケートを基にした教育課程の改善や授業づくりへの反映につなげていきたいと考えます。

まとめ

本研究に取り組むにあたり、これまでの研究実践を踏まえ、また、一部引き継いだことにより、効果的な研究の推進につなげることができたと考えます。また、カリキュラム・マネジメントという広範囲な内容をマインド・マップにて見える化したことで、教師一人一人のベクトルを同じ方向に向けさせたことも大きな要因であったと言えます。取組1・2の課題に挙がっている学部間の連携においては、学部ごとに柔軟に運用できる研究体制と、今年度は「家庭分野」を軸とした小・中・高の連携をねらった学部連携班を立ち上げましたが、十分ではなかったことが考えられます。一方で、教師の教育課程への意識が高まった結果として、他学部の取組等の共有化が増々求められるようになり、12年間の子どもの学びをつないでいく上で、学習内容の系統性の明確化に着手できる機会になったと捉えています。

本研究のゴールは「社会に開かれた教育課程」の実現でした。各取組にて、大学や地域等と協働した授業づくりや、社会を見据えての必要な資質・能力の調査等により、これまで本校独自に検討していた教育内容から一歩社会に踏み出して検討ができるようになったと考えています。また、社会への本校教育の普及にもつなげることができたと考えます。平成30年度末に教師一同で語り合った、「学校PATH」である10年後の学校の夢と希望の実現に向けて、本校は一歩ずつ前へと進み出しています。新学習指導要領の全面実施とともに、教育の質を高めながら、10年後の学習指導要領改訂に向け、本校の研究成果が一助となるよう、今後も研究の発展と深化を図り、また、地域の学校へ研究成果を普及していく所存です。

熊大附属特別支援学校の10年後～未来の作戦計画～

平成19年度に、PATHの手法を用いて、本校の10年後を見据えた夢や希望を全職員で語り合い、それに向かって取り組んできました。
10年後となる平成30年度には、10年前の夢や希望を振り返るとともに、2029年を見据えた次への夢や希望を全職員で語り合い、新たな一歩目を踏み出しました。

はじめの一步

2019.3.18

今



- ・芝刈り機が一台。時間も道具もない。
- ・駐車場が整備されていない。
- ・中学部の興味のある子はタイピング・プログラミング導入中。
- ・地域資源活用から生徒の成長につながってきている。
- ・附特ってどこにあるの？どこ？附小の隣？タクシーも知らなかったり…。
- ・タブレットの台数が増えてきている。
- ・小学部の子ども達もSOに参加している。
- ・小学部の学習にSTが参加している。
- ・高等部のカフェを通して地域の方々、事業所の方々、旧職員も来ている。
- ・小中高で研究に取り組んでいることの共有が難しい。
- ・地区コーディネーター会に参加できていない。教育相談の時間を十分にとることができていない。
- ・保護者より「この学校はいつも笑顔があっという」「雰囲気がいい」
- ・研究推進の雰囲気がいい。
- ・運動場の水はけが悪く、雨天の行事では毎回スポンジで水を吸っている。
- ・掘りプロに期待。
- ・運動用具の不足。
- ・実習後に特別支援の教員になりたいという学生がup!
- ・会計の仕事がとにかく大変。負担になっている部分が多い。
- ・すずかけの会の事務作業大変。
- ・希望通りに就職している。定着支援の充実が課題となっている。
- ・熊大の特支科以外の先生と連携できている。10年前に比べて良い。

- ・職員会議のペーパーレス。
- ・学部会を2週に1回。
- ・小中高の情報の共有→職員の半日交替。
- ・ICTを活用した授業実践。
- ・教育課程検討システムの改善。
- ・すずカフェの中での音楽鑑賞や読み聞かせなどのイベント。
- ・SOや先輩の活躍の話を聞ける機会。
- ・生涯学習のニーズを収集する。
- ・運動場に出るような仕掛けをしてみる。
- ・附属の施設を地域へ開く。運動場や体育館。
- ・タブレットの購入に向けて準備計画。
- ・作成した動画の共有。「YouTube」附特チャンネル。
- ・P研→週1回+月1回での充実。
- ・すずかけの家改築プロジェクトを考え始める。
- ・プログラミング、タイピングetc…学習内容へ取り込む。



3年後

- ・お便りが少しでもペーパーレスで進んでいる。
- ・職員駐車場のコンクリート化。
- ・P研の週2実施。
- ・研究参加者333人。
- ・学びの展開が分かりやすくなっている。
- ・行事の精選。学部会月1回。
- ・19:00までの退勤。
- ・タブレット生徒一台。
- ・運動用具の充実。
- 外部指導(専門性)の導入。加)。
- ・居住地校交流活発になり、地域行事に行く子が増える。
- ・NIE→パソコンやタブレット、新聞を活用してニュースを話題にできる生徒が増える。
- ・「附属特支はこちら」の看板。
- ・大学の先生方と仲良く連携。
- ・すずかけの家、建替えに向けての図面スタート。
- ・熊大附特といえこれ！という研究。
- ・図書室活用が充実。
- ・科研費を申請する先生が増える。
- ・企業からの研修が増える。
- ・すずかけの会での講座。



- ☆「熊大は支援学校の隣だよ」と言われる。
- ☆国の役人の方々も見に来るような学校。
- ☆「全国の先生が憧れる」
- ☆だれもが知っている(教員以外の人も)。知名度up!
- ☆県立学校の教師が附属で仕事をしたいと思えるところ
- ☆情熱大陸出演♪

5年後

- ・コーディネーターの加配が付いている。
- ←地域のいろんな人の相談役に。
- ・教員採用試験(実習生)の全国合格率20位以内。
- ・教職大学院に1人は行っている。
- ・大学の予算がグリーンとup!
- ・A Iスピーカー導入。誰でも使えるICT。
- ・要録をパソコンで。
- ・パラリンピックを目指している生徒がいる。
- ・専攻科ができていく(進路選択の幅増)。
- ・情報系の進路に進んでいる子がいる。
- ・進路説明会(就職説明会に子どもが参加)。
- ・図書館の広がり充実。活用(司書・新聞・借用)。
- ・ボイラー室の改築。
- ・情報活用した授業の充実。
- ・福祉関係の職員が学校にいる。
- ・大学の中に入り込んでいく。行き来自由。
- ・場の共有も(大学の図書館でカフェとか)。
- ・音遊びや美術サークルがある。
- ・会議を減らして個人研究の充実。
- ・卒業生向けイブニングセミナー。
- ・居住地の学校行事や子ども会に参加している。
- ・施設面の整備を2つ以上。
- ・すずかけの家建て替え工事着工。
- ・卒業後の進路の幅を県立にも広げる。
- ・附属発テキスト発行



- ☆職員の仕事量が減って土日は仕事しない。
- ☆仕事ロボット(AI)導入。
- ☆質の高い教育をしている。
- ☆すずかけの家の建て替え→新築
- ☆図書館&カフェなどの拡がり。
- ☆地域の学校へ教師が講師で出向く。(VR活用、すぐに行くことができる)
- ☆困ったら附属にすぐに行ける←悩みを聞ける学校へ。

- ☆PT,OT,STなどが数地内、すぐ近くにいて学校と日常的に行き来している。(福祉関係機関)
- ☆実習生の教員採用試験合格率全国10位以内。
- ☆実習生が再び附属に戻ってきて子ども達に教えている。
- ☆働きながら教職員大学で学べる。
- ☆完全なるペーパーレス。
- ☆一人一台タブレット。大人も子どもも。各種届け書類もタブレットで。連絡帳やお便りも。印刷機がなくなっている。
- ☆パラリンピックを目指す子がたくさんいる。



- ☆有名人のたくさんいる学校。アートやYouTuber。生涯学習
- ☆ロボットをコントロールするような仕事があるだろうか

- 子どもが使いこなせる(プログラミング)。それに付随した学習をしている。



- ☆家庭生活(結婚など)充実。
- ☆ライフキャリアサポーター。
- ☆研究の参加者増へ。400人。
- ☆TV会議で研究参観できる。
- ☆すずかけの会のNPO法人化。
- ☆居住地交流が活発で自由に行き来している。
- ☆子ども達の夢や希望への進路保障。進路選択の幅への対応。

- ☆子ども達が近隣の小中学校を来している。
- ☆受検生増!100人。←学校で受け入れられる幅をもっと広げる。
- ☆大学の先生方と教育論の会話をしている。学生も一緒に。

- ☆駐車場立体化。
- ☆運動場がきれいで、水はけが良くなっている。
- ☆全天候型のプール。



10年後

公開授業

9:50~11:30

※授業場所は封筒裏面をご参照ください。

熊本大学や関係機関との共同研究に「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、日々の授業実践を中心に授業改善・開発をしてきました。研究最終年度となる今回は、これまで見出してきた「授業づくりのポイント」を有効に活用しながらの授業を見ていただきます。

言葉による認識力を向上させるために、言葉で表現することに重点を置いた学習をします。

小学部

I 国語 45分 ※低学年は30分	1・2年生 岩切昌大 相談室3 「今日はどんな日?」 ～たくさんはなそう!～	3・4年生 小田貴史 相談室2 「くわしく話そう」 ～助詞「の」を使って～	5・6年生 菊池佳奈 3組教室 「言葉を動作化しよう」
	山中友紀 1組教室 「登場人物になって お話を読もう」	四方田愛美 2組教室 「言葉を楽しもう!」	
	10:05~10:35	9:50~10:35	9:50~10:35

中学部

I 道徳 45分	美術室 「マラソン大会を振り返ろう」～自分のライバルとは～ 生徒が各教科等で経験したこと、道徳の内容項目を関連させたテーマ設定の授業を展開することで、多面的・多角的に「自分のこと」として捉え、考える学習を行います。また、代弁的・翻訳的なかわりを通して、生徒の気持ちにアプローチをしながら考えの深まりをねらいます。 日置健児朗・立山裕美・山田哲博・神代博晋・濱近香里・上中博美・後藤匡敬	
	全学年 一斉 9:50~10:35	
II 数学 45分	学年縦割り クローバーグループ 神代博晋・立山裕美 中1教室 「スポーツ結果大胆予想」 数学科における見方・考え方を働かせて、示された情報を表にしたり、データを基に試合結果を予想したりして、説明していきます。	学年縦割り スペードグループ 上中博美・多田 肇 中3教室 「計算してみよう」 数の仕組みや、整数の加法・減法などの基礎的な知識を使って、課題を解決していきます。
	10:45~11:30	10:45~11:30

高等部

I・II 家庭 90分	1年生 奥田隼人 田口朱美 高1教室 「衣服の手入れ」 「健康」で「快適」な生活の実現に向けて、衣服を手入れする必要性を考え、目的や個々の実態に応じた手入れの仕方について、体験的で問題解決的な活動を通して学習をします。	I・II 職業 90分	2年生 辻 清美 上園宗徳 高2教室 「わくわくライフII」 現場実習や学校、家庭生活における現在の自分を見つめながら、生徒たちが夢や願いを込めた、それぞれの『わくわくライフ』の実現に向けての一步を考えます。	I 自立活動 60分	3年生 倉田沙耶香・古里王明 金輪祐子・永井崇雄 高3教室 縫工室 音楽室 「チャレンジタイム」 ①自己理解と特性理解、②作業能力と体調管理、③集団の中でのコミュニケーション、④作業と休憩の切り替えの4つのグループの中で、個の課題へアプローチしています。本時は、①②④の3つのグループを公開します。
	9:50~11:20		9:50~11:20		9:50~10:50



全体説明

11:40~12:15

体育館

本研究の概要をマップとして視覚化し、本校が目指すカリキュラム・マネジメントやこれまでの研究成果、課題等について説明します。

研究主任 多田 肇



ポスター発表

13:05~14:40

前半・後半 (45分間交代)

公開授業の授業セッション及び、これまでの研究の取組について発表をいたします。また、共同研究者の方々と直に話せる機会を設けています。

13:05~14:40	体育館	カリキュラム・マネジメント	教育課程のPDCA	学部連携班の取組
		附特就職支援ネットワーク会議	中学部 特別の教科 道徳	
		福祉・労働機関	科研費	

※前半と後半に分けてセッションを行いますので、別紙のポスター会場案内図をご参照ください。
前半 13:05~13:50 後半 13:55~14:40

ブレイルーム	小学部の研究	小学部 国語科	小学部 地域資源の活用及び協働
	中学部の研究	中学部 数学科	中学部 地域資源の活用及び協働
	保健 性教育		
音楽室	高等部の研究	高等部 地域資源の活用及び協働	
高1教室	高等部 家庭科		
高2教室	高等部 職業科		
高3教室	高等部 自立活動		



後日、本校HPからも閲覧することができます。

講演

14:50~16:20

体育館

「学習指導要領の改訂を踏まえた特別支援教育の推進」

講師

中村 大介 氏

文部科学省 初等中等教育局
特別支援教育課 特別支援教育調査官

引用・参考文献

MEMO

- ◇熊本大学教育学部附属特別支援学校 (2018) 研究紀要第32集
- ◇熊本大学教育学部附属特別支援学校 (2012) ポラリスをさがせ～熊大式授業づくりシステムガイドブック～ (ジ
アース教育新社)
- ◇月刊実践障害児教育 8月号 (2018) 第45巻第8号通巻530号 (株式会社学研プラス)
- ◇澤井陽介 (2017) 授業の見方「主体的・対話的で深い学び」授業改善 (東洋館出版社)
- ◇全国特別支援学校知的障害教育校長会 (2019) 知的障害特別支援学校における深い学びへのアプローチ
- ◇トニー・ブザン (2008) マインドマップ超入門 (株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン)
- ◇前田康裕 (2016) まんがで知る教師の学び (さくら社)
- ◇武富博文／松見和樹 (2017) 知的障害教育におけるアクティブ・ラーニング
- ◇丹野哲也／武富博文 (2018) 知的障害教育におけるカリキュラム・マネジメント (東洋館出版社)
- ◇中央教育審議会 (2016) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な
方策等について (答申)
- ◇文部科学省 (2017) 特別支援学校教育要領・学習指導要領
- ◇文部科学省 (2018) 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編 (幼稚園・小学部・中学部)
- ◇文部科学省 (2018) 特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編 (小学部・中学部)
- ◇文部科学省 (2018) 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編 (幼稚園・小学部・中学部)
- ◇文部科学省 (2019) 特別支援学校 高等部学習指導要領

研究同人（平成29年度～令和元年度）

おわりに

本校は、「附特」と呼ばれることがあり、その頭文字をとって「FTK」で目指す姿を示しています。「F」は「ふれあい」,「T」は「つながり」,「K」は「かなえる」です。特に,子どもたちの夢や希望を「かなえる」学校となるため,この3年間で熊大式マネジメントシステムを構築してきました。また,夢や希望を「かなえる」ために,関係機関や地域と「ふれあい」「つながり」協働して,地域に開かれた教育課程を目指すとともに,授業改善を繰り返し,より充実したカリキュラムとなるよう工夫を重ねてきました。

3年間,多くの研究に取り組んで参りましたのでやや盛りだくさんの内容になりました。皆様の興味のある取組と本校の研究が「つながり」,協働して更に研究を深めて参りたいと存じますので,是非忌憚のないご意見をお寄せください。

最後に,本研究事業を委託・ご指導いただきました文部科学省,研究推進にご指導をいただきました先生方,本研究発表会をご後援いただきました皆様に心より御礼を申し上げるとともに,ご参会の皆様にも今後本校教育へご支援ご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

副校長 前川 美穂子

校長 八幡 彩子
副校長 前川 美穂子
教頭 鶴田 雄二

	主 事	教 諭	〈小学部〉	〈中学部〉	〈高等部〉
			紫垣 昌希	赤崎 真琴	毎床 英樹
			上羽 奈津美	日置 健児朗	奥田 隼人
			岩切 昌大	立山 裕美	辻 清美
			四方田 愛美	神代 博晋	倉田 沙耶香
			小田 貴史	濱近 香里	永井 崇雄
			瀬田 理	上中 博美	瀧 ひろ子
			菊池 佳奈	後藤 匡敬	
			岩下 佳美	多田 肇	

非常勤講師 谷山 文江
就職支援コーディネーター 井芹 好美
養護教諭 後藤 純子
栄養教諭 小田 由衣
熊本市教委からの派遣研修員 山中 友紀 山田 哲博
(育児休業) 原口 さつき 境内 エミ 荒川 由希子 田中 美由紀

旧職員 國友 昭彦 税田 裕之 前田 忠彦 西岡 奈緒子 田中 晶子 福永 哲也 梅田 信穂

本研究の共同研究者及び協力者（五十音順、敬省略）

熊本大学

今井 伸和	(熊本大学大学院教育学研究科)	大石 康晴	(熊本大学大学院教育学研究科)
菊池 哲平	(熊本大学大学院教育学研究科)	久保 昌子	(熊本大学大学院教育学研究科)
坂下 玲子	(熊本大学大学院教育学研究科)	雙田 珠己	(元熊本大学)
高崎 文子	(熊本大学大学院人文社会科学研究部)	瀧川 淳	(熊本大学大学院教育学研究科)
田口 浩継	(熊本大学大学院教育学研究科)	武田 珠美	(熊本大学大学院教育学研究科)
竹中 伸夫	(熊本大学大学院教育学研究科)	塚本 光夫	(熊本大学大学院教育学研究科)
中迫 由美	(熊本大学大学院教育学研究科)	仁野平智明	(熊本大学大学院教育学研究科)
藤田 豊	(熊本大学大学院人文社会科学研究部)	藤原 志帆	(熊本大学大学院教育学研究科)
千川 隆	(熊本大学大学院教育学研究科)	前田 康裕	(熊本大学教職大学院)
増田 仁	(熊本大学大学院人文社会科学研究部)	宮瀬 美津子	(熊本大学大学院教育学研究科)
本吉 大介	(熊本大学大学院教育学研究科)	吉村 昇	(熊本大学大学院教育学研究科)

附特就職支援ネットワーク会議委員

浦田 裕之 社会福祉法人三気の会相談支援事業所たんぽぽ	小川 倫央 熊本障害者職業センター
熊川 嘉一郎 社会福祉法人ライン工房	里 祐子 田畑 美穂 くまもと障がい者ワーク・ライフサポートセンター縁
園田 亮吉 熊本市障がい者相談支援センターじょうなん	中田 安俊 福田 悟 チャレンジめいとくの里ゆめくらしワークス事業部
原田 文子 NPO法人KP5000	山田 浩三 アス・トライ就労移行支援事業所
吉田 周生 熊本県中小企業家同友会	